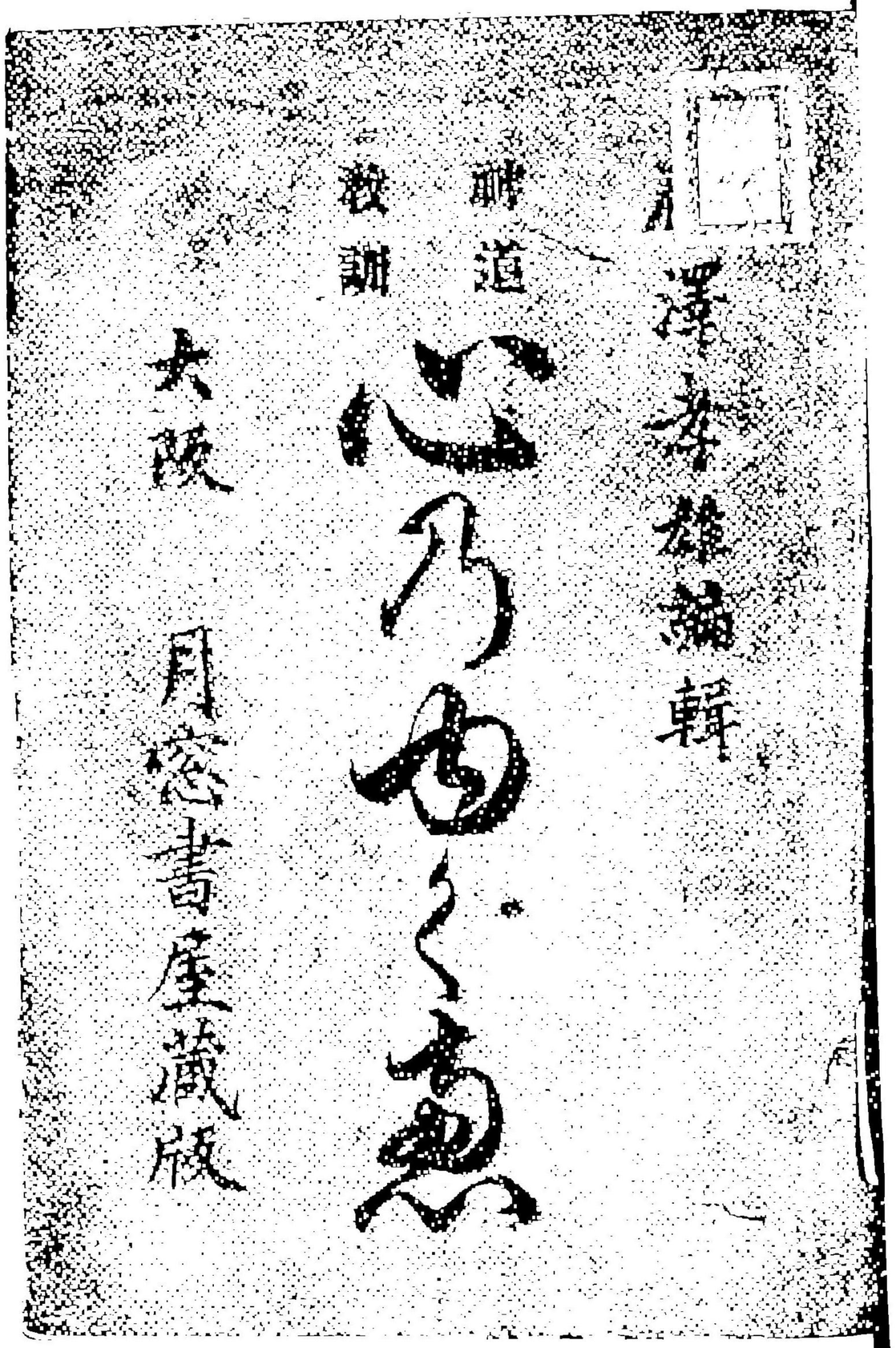

014002−000−9

特18−227

心の行衛（神道教訓）

伊澤 孝雄／編

M29

ABB−0254

特 227

序

夫登高はかならず自卑す賢哲の金言哉

茲に樹下老翁の屢編るこゝろの行衛は全く正心

誠意に原の階梯にして其譬喩笑談千種萬轉の卑

近なるは譬ば山に材を生ずる所以あれど嶺頂に

は良材稀地卿で深谷に求るに易し尚海中に珠玉

ありといへども徹底に至らざれば得ざるがごと

し是所謂童蒙女子の耳に入易からんため一片の

婆心ならん歟じかのみならす其譬喩深重にして

理學の蘊奥鳶戾天魚躍干淵其上下察なる意を含
喩せるも亦奇ならずや須く高を極め止至善人あ
らば是幸の甚しきならんや聊はし書に記し畢ぬ

蒼浪庵櫻瀧誌

神道教訓

心の行衛上の巻

伊澤孝雄編輯

○道といふは天より人に受得たる仁義禮智の性にしたがふ是なり此の仁義禮智をすべていふ時は本心といふ此本心は固あきらかなるものなれども情の偏僻所より氣隨身勝手をなし其本心を曇らしひかりをうしなふを人欲不仁といふなりされば固有本心の思ひは仁の道すじ人よくの私案は不仁の道すぢなり男女とも十五六才より心の行衛次第にて仁と不仁に道すじわかる實に大切の時節なり人欲もはじめはいさゝかのことゆへ我も忘ぼれ親も放心とみゆるし置ゆへ思ひすしらずついに一足不仁の道へ踏こむときは生涯患難困窮またい病身短命種々の憂苦あつまりて身をほろぼし家うしなふにいたるなり古歌に「かばかりの事は浮世のならひぞとゆるす心の果ぞかなしき」とこの歌の道理をよくわきまへ自然本心に是はあ

しきとおもふことわらば忽ちに身に立かへりいさゝかのうちに先非を悔むときゝ再び人の人たる仁の道へ出るなりたとへば人の命六十年を定命としこれを六十里の道法と積て見れば始じめ二十里は部屋住道中として廿一里目より五十里までに生涯身の修りをせねばならぬさすれば中三十里なりまの三十里のうちにこゝろの行衛を見うしなひあるひは三四里も不仁の道へまよひ入れば亦もゞるゝ三四里往來七八里のまよひとなる又は五七里も迷ひ入れば出入十里十五里にも至るこれ皆血氣にはやる油斷からおこるとれはしそのはじめかしま立の足の丈夫なときは餘所眼わきみしてぶら〳〵歩行茶屋、煮賣屋ゝ長やすみし殊に足弱の女中ゝれを酒の相手にじやらくらと道草に時をうつしまたその上にいふはゞの嗜買てやりあまつさへ駕に乗せて自分は跡から附歩行うか〳〵するうち路銀は次第に乏しなる日あしいたける弱みを見こまれゞまの灰に附られたり種々の難義は迷ひ道には間あることなりわちらやこちらで鼻ついて不圖心づき懐中みれば用意の路銀はさつぱりなくなり物買ふといふても賓人なく節季晦日は掛取門前に市をなし跡へもさきへも行れぬ所から親類縁者に相談してもこれまでがおれまでといふて容易には相手にせぬ所を朋友頼んでなげいてもらいゞうやらこふやら聊か路銀を借り出して己やれと思ふて本道へ出かけた所が最早十四五里の迷ひ道ゆゑのこり十五六里の内ゝ己前のおくれを取もゞ去生涯のことを仕はたさねばならず實に氣のせける旅なりまればとて暮かゝつてから急ぎても草臥るばかりで道ばかの行ぬは笑止なものなりゆへに道は在レ爾而求レ遠と近き本心の道しるべに委去く尋ね問ふときゝ少しも廻り道はなゝそれにあの山のこの森のと遠き人欲に眼を附るゆへかやうの廻り道へ迷ひ入となりたゝ何れも若い足の達者な内ゝ惰弱放蕩の廻り道をせぬやう一心不亂に急ぐべし若も餘所見脇目がしたくならば爰ゞ一大事と親主人先祖の御恩のあつきをおもひ日の高ひうちに行越して置ば老ての氣樂さいはんかたなしこれ等はこ

〻ろの行術を能合點し見失はぬやう仁の道へ志すといふもの也かく前廣より道積りのよさ人は生涯旅勞なく堅固にて身修り家齊ひ子孫永續すべしこれ則仁なれば榮の謂ならんか

孔子曰道二仁與三不仁一而已矣

古歌

道といふ言葉にまよふとなかれ朝夕おのがなすわざと知れ

君子の行は弓を射るに似たりと聖人これを教示給ふ弓射るいむかふの的を目當とし黒星をつらぬくを本意とするも去射そんじるといへども的はとがひるやうなし唯わが射前のあ去きと身に立かへりて身のそなへを正しくし射まへを正しくするにしくはなし君子の行ひもそのごとく萬事は向ふて節にあたらざれば忽ち我身よ立かへり身心ともにたいしくなしたまふゆへによろづ節にあたらずといふ事な去小人はたいむかふの的へばかり眼をつけ當らざれば的のわざのやうにこゝろへるい僻まとなりたとへば日々我身のれこなひも的にひかふが如し君臣父子夫婦兄弟朋友親類

縁者知音近附家内の召つかひ賣先買さき他人にいたるまで是にむかふてわが行なひの節に當るとあたらざるはひかふの的の事にはあらず我身の備へ心の射前によれり或は主人の的にむかふには敬の射まへを正しくしよろづ直に私欲身勝手なく奉公に蔭ひなたせざるときはいかなる主人の的も百發百中せずといふ事なしまた両親の的にむかふには顔色を柔和にし機げんよく何事にもあふせをろひかず眞實にいとをしく思ひ愛しまいらせばんじ御安堵なさるゝやう事へなば父母の的に百發百中せずといふ事なし舅姑夫の的に向ふならば舅姑は眞實の両親とれもひ露塵はどもへだてなく殊には朝ゆふの食事にも和らかなるものをとゝのへ夜具も輕くあたゝかなるやう心を用ひ枕もとの火いけ田薬粉盆冬は火桶など用意し又淋しく居給ふ時はさしあひなき咄しなどし細かに心がけ御身も御心もへだてなく安樂に持給ふやう實やかに事へまた夫は神と　思ひ大切に順ひ心安だてせず言葉をつゝしみ柔和にして嫉妬の念なく朝は早く

起夜は遅く寢て身をつゝしみ事もるならば則姑夫の的を百發百中堂を見るがごとし兄弟のまとにむかふならば兄は親に續て大切なり實に敬ひ事へ若父母過去給ひなば兄を親とれもひ事べし仁之實事親是義之實從兄是也と孟子も既にのたまへり亦弟は親のかたわれなれば殊にいつくしみ愛すべし兩親の心からはたとへば五人の子は五本の指のごとしいづれが切て捨らるべきやこの御心を推はかり生涯むつまじく親しむときは兄弟の的百發百中すべしまた朋友のまとに向ふては信實厚く心附ざる事はたがひに氣をつけいつも心のかはらぬやう言葉のちがはぬやうにする時は朋友の的百中すべし亦親類縁者は今はたとへ薄縁なりとも先祖から見れば皆したしき間がらなり故に先祖の思召を忘れず相變らず往來してしたしくすれば先祖へも孝となり親類縁者の的當らずといふとなし實先買先の的は家業第一の事なれば賣さきは主人買先は親の思をなし大切にし一點の强欲なく實買の法にかなふやう取引に無理せず二重の利を貪らず正直

を元手とし骨をれしまず出精する時は賣さき買先とも門前に市をなし日增に繁昌して家業の的百發百中すべし又妻子召つかひ出入のものゝ的にひかふては殊に我身の射前を正敷し假にも人の羨む事をせず一家の手本とも成べきやう厚く慎しみ情ふかく眞實に慈憐自然よからざる事はもるやかに教訓し善に導きもしまた善事あらば急度譽つかはし外々のものもろの善を見習ふやう仕なし兎にも角にも人のそんじざるやう心を用ふれば妻子めしつかひの的百發百中すべし萬事わが身に宜歸るは君子の道なり小人は是に悖りて我射前を不正賤しふかく傲り高ぶり上を侮り下を虐げたのれ一分の奢りをきわめ不義放蕩逸なれば他人はいふにたよばず家内のものまで恨み腹立一家の亂れとなる其本亂而未治者否矣本たる主人の射前が亂るれば世間からも疑て預た銀は返せといふかしたものは取に來る又妻もろ〳〵うたがひて此方の旦那も此頃は烏渡の用事も際が入時折は夜分もとまつて戻らるゝやう考へても疑わしいてつきりこれは妾

宅を拵へたに違ひはない此間の芝居行に出入のれまつが見て戻り旦那様の傍に見しらぬ女中が居ましたといふたが證據ろのやうな事聞と内ばかり倹約しても様の下の舞じやとろろ〳〵内義も奢りだす又店の番頭手代までうたがひを生じ今の旦那の身持では中〳〵長ふは持てぬ身体所詮我等の別家する時節は見へぬすりやいつまで奉公しても仕舞はともに組んで落難儀しやうより今のうちちつと仕がくせざ成まいと是等も私欲の心を生じ同士軍を發し家内のこらずこゝろの的にはづれ亂軍流れ矢と成ろの流れ矢のために各々身をはろぼし家をうしなふにいたるかなしい哉先祖は倹約質素を守り粉骨碎身の功によつて富足り持つたへし田地株家督家屋しきも主人の射前次第にて銀主かたへながれ矢となり諸道具衣類も質屋の蔵へ流れ矢となり家内の軍勢何百人と聞へしも夫婦二騎に打なされ心ぼろくも親るい別家へかゝり人何とならん身の果とせんかたもなくあきれはて茫然と心の行衛しれざるはあさましき事ならずやこれみなわが身をわがでにあなどり我家を我破り我國をわがうつと聖賢の金言むべなる哉天のなせるわざはひはのがるゝ事もあるべけれどわが身よりなせる身勝手我儘の孽はのがるゝ事あたはず藍に仰向て吐唾はかならず向ふへはかけずしてかゑつて我顔をよごし我身をけがすなり形地に影の添がごとしこれ則自業自得といふ恐れてもれろるべくつゝしみてもつゝしむべきは心のまとなり

子曰射有似君子失諸正鵠反求其身

古歌

あづさ弓はづの違ふたとのはゝ何をいふてもあたらざるらん

夫人必自侮然後人侮之家必自毀而後人毀之國必自伐而後人伐之大甲曰天作孽可違自作孽不可活此之謂也

孟子も人の性は善なりと誠なるかな仁義の心を固有すれば人我はなき筈なれど小人は氣質の偏倚を正しくする事をしらざるゆへ習ひ性と成終には人欲増長し不忠不孝不埒放蕩我慢と成人を見くだし或はむごくつらく

去果い我身の害となる事を恐れず我慢の心より終にはわが家をうしなふ事をしらず己を是とし人を非と見る所よりかなら身をほろぼし家をうしなひ人をうらみ世をうらみ神をも敬まはずあまつさへ神の教をそしり邪智佞奸にして人をも罔世法王法を事もなげにいふ族を自暴の人とも下愚の人ともいふ是等の人は神様もなく〳〵見放し給ふならん飽食暖衣逸居而無教則近二於禽獸一萬物の靈と形地をうけながら畜生の仲間入てそかなしきことならずや彼賴政の矢さきにかゝつて亡び去鵺のうたひも勸レ善懲レ惡の意味よつゝりしは尤至極の譬喩なり彼變化頭い猿尾い蛇手足は虎啼聲ぬへに似たり恐しなんども恐なる形地なりけりと世よはこのやうな心の人もあらん是等てそみ

つから心を損ふて下愚となり果たるとゝるしなりさても我惡念人の障とならん惡念とは人欲増長して種々の惡だくみをなし人に憎れ仁義の心曇りはて人交りの出來ぬなり傍若無人の鵺同前の族い丑滿頃に黑雲覆ひ主上を腦すといふて夜半八ッ頃までもたわいもない氣儘な事言歩行酒色にふけり主人親兄長などをなやます變化なりかはどまで畜生に近く成りさがりし人でおしでも體よ片輪な子はゞ可愛ひ習ひ其両親はいつ迄も子供のやうに思ひおし夜分寐間へ入ても目もあはず四ッと過九ッの鐘を聞ても戻らねば兎やかくと案じ何處に何して居るやらもし喧嘩口論でもして打叩かれはせまいか大酒して道路に倒れてい居ぬか露夜を受て病を引出ねばよいが或は遊所の女に欺れはせまいかと案じ過し寐覺がちに心細くものがなし

きはなべての老のならひなれば雖られぬまゝに夫婦とも越かた行末の事まで思ひつゞけあの心ではこの跡は繼されぬいつろ妹に養子するか在所の甥を引取て世話しやうかと跡やさきの思ひにくれろも我等は十一の年からこの大阪へ奉公に出長のとし月首尾やうつとめ主人のかげて宿を持てのとし迄五十年來ひと切芝居も見た事なく一日樂な目にもあはずよし見たい事や喰たいものゝ有時はさぞや在所の親達はあじないもの喰て不自由にくらし給ふと思ひ直し唯親達や子供等の行末をころ安樂にくらさせたいと思ひし心の張弓で晝夜稼だ其かひに今ころはさして不自由もない身となりうれしや悴に嫁貰ひ初孫の顔見て夫婦がたのしもと思ふ心を仇になし夜る晝外を家とするあの放蕩では此家が持とげられぬのみならず果はかなしき身と成り雨露にしはれて乞食非人と成やせんと恩愛に引れては案じ過しに胸をいため両親諸とも涙に夜着の袖をしぼり終には積氣のたねとなりくるしみなやみ給ふはげにいたましき事ならずや　一さらぬだに老てはものゝかなしきにもふべの猿よ聲なきかせろかく両親をいためくるしめ命までもちゞひる不孝をいかでか人といふべきやろれにひきかへ悪黨息子の驚どのは世間へ出ては人がましく口をきゝ利口ばれども尻のつまらぬ猿智恵は顔に相應せるもへなり其くせ強欲に親主人のもるさぬ金銀を持出す爪の遲しきは虎の手足にさも似たり又あちらでもうろをつきこなたでも僞を云ぬらくらぬらつく所は尾の蛇もいやといはれず夜る晝ともに飛歩行何所を宿とも定めぬは悉皆ぬへの有さまと成しへをきかず我儘に育ちて増長せし故心の行衛なくなれば身のはても窮の如く海川へ押流れ塵芥のやうに漂ふて底の水屑と成やせん恐るべし〳〵

孟子曰自暴者不可與有言也言非禮義謂之自暴也

古歌

くらきよりくらき道にぞ入にけるはるかにてらせ山の端の月

聖人水の流れを見て道のすがたの自然をしめし給ふ晝夜共やすみなく流

れもく水は過ぎ來る水は續ぎ少も停る事なく流れ行うるはずといふとなく終には四海にいたる人も其ごとく心の修行たへまなくといまらざれば身を修め家を齊る功すみやかなり人々心を學び行を正しくし其うへ間斷なく心懸ればいつの程にかろの德身にうるはひ安樂の至極にいたるなりこの間斷なき事は人の修行のみならず天地萬物皆この理なり滋界晝夜とも運り通し星しも晝夜めぐり通し四季のれてなわるゝも春と立夏となり秋とうつり冬とかわりまた春と立かへり毫厘もといまる事なしろれにつれて地より生ずる萬物も其時をたがへず梅の花のさかりには黃鳥も見舞に來るほとゝぎすが啼時分は牡丹もわらひなすびと瓜は顏見合せ稻がうつむく頃は綿畑も眞白にあり野山のにしきする頃は鹿も妻こひ大根と蕪と中よふひとつの桶へ漬られて世界の萬もつきげんよふすら〳〵と流れ昔が今へ去年が今としへ流れ今年は來年へながれて行道の本体又海も山も里も畑も家も藏も其外諸道具衣類までずら〳〵流れて行先代からの

古ひのはながれ仕舞へばろのかはり又新らしい家藏諸道具衣るいまでが流れて來る皆もくものは過來たるものはつぐ此世にといまるものはひと色もなし人の身も母の胎内をはぎやあと流れ出てずら〳〵と流れきのふやけふまで坊樣いと樣といふた子がいつの間にやら嫁樣となながれ舞ぞのと流れろの花嫁花聟が子持と流れ祖父祖母となながれもく内には初孫が元服するやうに流れて來るいとの乳母がひさしい御目にかゝりませぬと杖ついて流れてきたり前かた居た下男が立樂して流て來たり祖父や祖母は腰曲めくにへながれてもくろんなら年寄からさきへながれるかとれもやわたしも七人よろこびましたがいまではやう〳〵貳人のこり五人はやうさうやきやうふうでながれて行ましたと泣て居る内義もありふたりの孫が疳と丹毒でながれて仕廻ふてこのごろは手があひてどうも仕やうがないとしやくりわけて居る祖母さまもありかゝり息子を流してしまふて腰ぬかして居る親父もありとゝをながして目をはらして泣てゐるかゝもあ

り子をたんと殘してかゝがながれて子にせぶられ商賣休んで難儀して居るとゝもありその外伯父が流れ叔母がながれ兄が流れ弟がながれ甥姪がながれ從弟がながれ親るいが流れ手代が流れ下女や丁稚がながれ或は女房子兄弟をのこらずながして孤獨鰥寡となりて世にたのみなき身となるもあり實によろづのあとい賴むべからずといつの間にやら金持が貧乏人とながれてゆく貧乏人が金持に成て流れて來る家藏賣でながれてゆくもあり株家督買て流れて來るも有世はさま〳〵のながれやうあり小町の歌に「花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」と花が流れりや小町も流れ女郎が流れりや客もながれ馬鹿がながれりや利口もながれ馬も牛も犬も鶏も烏も猫も鼠もヒン〳〵モウ〳〵ワン〳〵にやん〳〵カア〳〵ちう〳〵ながれてゆくこのやうに流れてゆく常なきことを見ながら自身ひとりは流れぬつもりで意地ばつて居る人も澤山あり

これをたとへていはゞ川をながるゝ芥が杭にかゝつたやうなもので其のかゝつた芥にまたかゝり其うへゝはかゝりついには杭が折れてもながれにやならぬ此の杭もいろ〳〵有て名聞の杭利欲の杭もあり金の杭色の杭もあり悋氣嫉妬の杭もあり短氣かん癪の杭もあり又愚知の杭などにかゝつて年のよるをかなしみ死するをおそれてさま〳〵に意地ばれど杭諸とも流れりやどうも仕樣がない尤も我慢の杭に私智身勝手の芥がかゝつては通船の邪魔となるものありその意地ばらす根本は何のわざで意地ばると眼を附て見るべしこれが人間一大事の所じやこの一大事を會得するを道をしるといひ本心をしるともいふされども名ばかり聞ても肝心の本体はどのやうなが道やら本心やら目に見へぬそこでみながうろ〳〵ぢて居る今此意地ばつたり氣張たりする根本をたとへて云ば我身の用事とかけに雇人をして其つかふべき雇人に使れて生涯氣ばり通し扨も氣毒なも

のじや其雇人といふは家蔵金銀も此世に居る間しはらくのやとい人衣類道具もこの世逗留中の雇人其はか飯も酒も菜も肴も雇人又女中なぞは櫛かうがい紅粉れしろいまで殘らず雇人この雇人に上下があつて少しでもよいやとい人がしと成て櫛かうがいに三十両五十両も雇人してひけらかしに歩行女中もまゝありつれ〳〵草に名利につかはれて靜なるいとまなく一生をくるしむころ愚かなれ財多ければ身を守るにまぞし害をかひ煩ひをまねく媒なり身の後には金をして兆斗をさろふとも人のためにぞ煩らはるへきと達人の眼遠はず實に雇人の金銀のために跡しきの爭ひを起し後の煩ひとなり町内のやつかいになるもあり又雇人の金を苦に病て命をちゝむる人もあり雇人の金銀澤山に有まゝ遊所通ひ或はあまた妾をかゝへ終には蔑蔑して流るゝもあり雇人の酒のみ過し二日も三日も雇人に遣はれまだ其上に家蔵も此雇人が自由にして果は内損吐血までさせてくださる深切な雇人また飯の雇人もいつも三ばいなら三ばい雇ふて置はよいに八盃も雇ゆへ食しやうし脾を損ひ留飲じやの黄疸じやのと雇人に煩らして貴ふ大低の世話じやない又眼前かり物としれた紅粉れしろい頭のかざり梅花水油の匂ひに心をとらかす息子や手代もあり世界中が大かた雇人に遣はれて眼をぎろ〳〵して氣ばつて居るろのやとい人諸とも手を引て流るゝといふ事に氣がつかぬあさましき事ならずやさて此雇人の金銀財寶をたのみに思ふても時の間に煙となる事もあり山ぬけや洪水で流て仕廻ふともありいつれたのみにならぬは雇人のならはしなりゆへに我身もよろづの事も頼みにはならぬと心得が常なきをしるといふものなり此常なき事を自得すれは喜怒哀樂物欲のためにゆづらはず生をも貪らず死をも恐れず生死は天命にまかす所より見れば生も道なり死も又道なり古歌に「露をなぞあたなるものとれもひけん我身も草に置ぬばかりを實に夢幻泡影の命なれば何時死しても跡にうしろぐらき事のなきこそいさぎよけれかく我身の常なきを自知すれは親主人夫婦兄弟親類朋友も常

なき身なりさすれば何時しれぬつねなき主人常なき我が身なれば骨をおしまず奉公大事ゑせにやならす親子兄弟尤も眞實にこゝろを用ひ孝養を盡し跡打つた鐵砲にならぬやうし給ふべし「今のみと思ひて父母につかへたいのちなたのみそさだめなき世に」また常なき夫婦なれば澤山そふゑおもいず殊さらむつまじく和合しくらさねばならず又つねなき親類なれば折ふしの出會にも互に心のへだてなくともに力ともなりたきことなり又常なき朋友なれば よろづ誠を盡し相たがひに身のれこなひをたいに合心を用ひ交りたき事なり親兄弟を澤山ゑ思ひ夫婦の中もたくさんに思ふいみな長き一生といふ杭にたがみ付て居るゆへなり一生といふ呼吸の出入ゑ。り外ゑ一生あることなし五倫の交はいふにおよばず萬見るもの聞事のこらず今が名殘と思へばひとしはなつかしくおもふ所より愛敬憐みいたわる心も出來或ひい敬ひ貴む心と成なりこれ則道の本体仁のはたらきなり

さすれば非情の物にいたるまで損ひやぶる害もなく世界一面によかれがしには思ふ我なしと云ものなりかく我なしと成て見れば流れながるゝ水のすがたも世界も我身も毫厘もといまる事なくながれ〳〵てやすらかに生涯を渡るにあらずや世の人これを緩に思ひ誤り給ふべからず

子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜

哀歌　雨あられ雪やこはりをろのまゝに水としるころとくるなりけり

哀歌　散ばころいとい櫻はめでたけれうき世になにか久しかるべき

神道教訓　心の行衛上の巻　終

神道教訓

心の行衛下の巻

伊澤孝雄、編輯

○世の人貴賤男女共われは愚なりと思ふ人はなきものなけいかに愚なる人も我賢しと思ふは小人の常なりされぞもすべて我このむ事には前後をわすれ身をはろぼし家をうしなふ事まゝあり聖賢これを傷給ひてをしへを立給ふ罟擭陷阱は鳥獸を取る道具なり罟はあみなり擭は締陷阱は落し穴なり虎熊などの荒き獸は陷し穴に劒を立置れとし入て取るなり又魚類鴨鳩雀などと網にてもとる又狐などは締にて取る去ながらこれ等の鳥類畜類は身命をやしなはんため命をとらるゝ事ぞかし狐などは

たがひれはきものゆへこれを締にて取は彼つり狐などの書にしるせしもやうにてはなきよし或人の云へるは獵師狐の通ふべき所をしりて杭を打貳三拾間もある細引を附右杭の傍に鼠の油揚を付又鳴子を附置遠く離れて細引の端を持隠れ居るさて狐右の油鼠の臭をしり來りてうかゝひ居る所を彼細引のはしをきびしく引ときは狐鳴子にれどろき遠く逃さるしばらくして亦きたりうかゝふ所をまた〳〵細引をひく亦驚き逃るかくすること

とあまた度にれよびぬれば狐も馴て鳴子を聞てもれどろかず兎かく鼠の油揚に心を奪はれ一身に魂なく前後を忘れ茫然たる所を獵師見すましろ〳〵進みよつて棒にて擊倒しとる事なり此はなし尤よき譬へなり人はれのれ〳〵の家業さへつとむれば身命をやしなふはいとやすき事なりろれに人欲の爲に色といふ締酒といふ締名聞のわなにかゝり生涯をわやまち空しく果るはれろかなるいたりなり男女とも若きうちは兎角色欲のわなにかゝりやすし息子や手代の色と酒との締にかゝるはじめは大かたが遊藝の會や參會の代もの參りの戻につれの野良狐が遊所を通り締の仕かけたところへつれてよるされぞもはじめのはぞはうひ〳〵しくさのみ凝る氣もなかりしが不圖した事から油鼠になじみが出來たん〳〵と功者にな

り壹人立て行やうに成るされども父母や主人の異見の鳴子をれろれしばらくづゝは遠ざかれど彼鼠どのから日弥を越せば何やら胸がだく〳〵して二階や部家でひらきてみればたら〳〵油を流しかけ逢ねばならぬ用事があると事ありろふに云越ばこなたもかねて逢たい意つりよせる手くだとはしらずうか〳〵通ふにつけては日に月にまし深ふかり末は妻じやの夫じやなどゝやくたいもない約束してろろ〳〵締に近よりて明ても暮ても鼠どのゝ事外は我身の勸もうはの空終には親主人の異見の鳴子も耳にいらず世けんのうはさも外聞もさら〳〵かまわず全身に我魂なく夜る晝のわかちもなく前後をわすれ茫然として色と酒との締にかゝり身體を打倒され生涯をあやまつ實に丹花の唇よく家國をくつがへすとむべなる哉甚しきは命もあやふきに至るなりかく云へば若輩ばかり酒色のわなにかゝると思ふは僻となり老たる人も時としてはれもひもよらぬことの出來るは色よくの締なり生涯れろるべき事なりまた婦人も野良役者にうつゝをぬかしたり手代や番頭竹

琴三味の稽古屋の相弟子などの油鼠にれもひつき不問ばなしを仕かければ男ねづみは心にうなづき穴際をきつてうかゝへば摘をこへてあいしたがひ不義惡性と一生人にもびさゝれ親兄弟にも見かぎられ味噌こし提る世帶して親類までの顔よごし生涯不自由に暮さにやならずこれみな色の締にかゝりしむくひなり前にいふごとく萬の事は我好む所より締にかゝると知るべしまた欲ふかき人はろのよくよりさま〳〵の工をなし人をつき倒してもれのれはよき事してやらんと懷手して金もふけの工夫のみに月日を贈り相應の身代も欲の締へ打こんで仕まふはあたら事なりまたむしやうに僭上張身分不相應の普請ごのみに奢り茶の湯などの締にかゝり數多の器物を買もとめ日々酝び高貴の人に交わり不風雅の人は下愚のごとく言なし身を高ぶれば世間の人にきらわれあまつさへ二代と續かず世年も立ぬうちにもとめし茶器も賣ねばならぬやうになりことに子孫を流浪さすれごりの締も儘ある事な

り兎角に心の行衛を見うしなはぬやうすれば萬の締にかゝる事なしこの締もむかふに拵てかけるにあらず我とわが手に締をこしらへ其締に我かゝるとしりてれろるべき事なり

古歌
子一曰人一皆曰二予知一騙而納二諸罟一攫陷一阱之中一而莫二之知一辟也
食呑があしき供よぶ根となりていろやばくちの花實さかせる

大人君子は赤子の心をうしなはずといふて幼稚の心は純一にして僞りなきものなり含德のあつきは比赤子とて赤子は性善の本にしてあきらかなるものなり固天に受得し儘也へ明德ともいふ大人君子はろの明德純一をやしなひ得てうしなはず生涯赤子のこゝろもへものゝために誘はれずこの德をもつて身を修め家を齊へ國をれさめ天下萬民にれよぼし給ふこの理を商家にたとへていはゝ明德赤子の心は生つきの本直なりこれをやしなひあきらかにするはもと直に利德を得るなり日々にみがき日々に發明すればろれだけ直うちがますなり眞誠廣勝手のために覆るゝときは折と

してくらくなり或は眼は見に迷ふて直うちをさげ耳は聞にまよふて直うちをさげ鼻はにはひにまよふて直うちをさげ舌はわざはひにまよふて直打をさげ身は觸るゝにまよふて直うちをさげ六賊諸とも明德のもと直をきらして居る人多し商人の店に色々賣ものをならべ置日々はこりを拂ひ奇麗に手入すれば客來りろのうちあれこれと買求むるがごとし世の人もろの如く世間に主人息子娘手代子者下女に至るまて並べ立てありろのうちを皆思入して買求るなりいにしへより國に孝子忠臣あれば國君よりろの直打相應に御買もとめ被遊ろの價としてろれ〳〵御褒美を被下事なり左なくとも忠孝は人のなさでかなはざるもと直なれば日々心のはこりをはらひ獨を愼むときは彼處の主人は家業にぬけめなく出精し父母に孝養を盡し夫婦中むつまじく兄弟中よく家内和合し召仕に憐みふかく取引に無理せず日々に繁昌するを見るときはさて〳〵よき人からなり誰もかくころありたけれと感心しろろ〳〵買人がつき德不孤かならず隣が出來て

追々篤厚の得意がふねるこれもと直の明德に利德を得て民を親にする意にもちかきものなりまた家業の事は手代まかせに捨置あるひは茶湯香花音曲又は酒色に長じ遊所通し朝寐夜遊びし月日をあだに贈る主人は世間から見てさて〳〵氣のどくなものじや長ふは持まいと評判するこれ等は店ざらしのねきもの疵ものにて見むく人もなくなり明德赤子のもと直が切て相手なければ仕まひには遠國下しの並代呂物となり生涯流浪するものなりまた息子や娘の身なれば息子娘の直うち相應にれとなしく第一は両親へ孝行に事へ息子は家業を專らにし算筆の稽古れてたらず得意の注文などにこゝろを配り手代並に働き我ぶらずなを遊藝はしらぬ方が直うちがむり又娘も形ふり端手ならずよろづ目立ぬやう殊には女の手業織縫うみつむぎ煎焚かげんの事までよく覺へ母の手助けとなり仮にもたわれたる言葉をつかはず中戸より外へいでずもつとも物見芝居などは度〳〵ものかぬやう身をかたくつゝしむときは器量は十分ならねども世間の人ず

目をつけ居れば娘は嫁に貰といふ息子は聟に取たがり諸々方々から買人が附れもはず直賣が出來よき仕合をするものなりこのやうな娘や息子は縁談がとゝのふて先かたへ賣てから元の手入がよいやへさきの家内もみな悦びます〳〵はんじやうするこれ等はもと直から一段利德を得るといふものなりまた同じ息子や娘でもひとつは親の育にて幼稚のときよりあまやかし惡作するをば氣丈と譽め横着はかしていと譽なし氣隨氣儘も仕次第はしいまゝに育ぬれば年頃に成ても家業は餘所事のやうに思ひ遊藝や惡所ぐるひが功者になり晝夜外を家とし放蕩日々に增長すれば両親もろのときやう〳〵眼をさまし異見をくわへまたは親類別家など立かわり諷諫すれども馬の耳に空ふく風と聞いれず强く呵れば刃ものを隠し持てあらぬ振舞し親しんるいも持あぐみ別間へ禁足さすもありまた娘も右のごとく氣隨氣まゝにろだてぬれば娘の直うちは何處へやら遊女や芝居の眞似をしてちよつと目には遊所の女に見まがゐる形ふりし物見芝居は人

よりさきにかゝさず行其かはり針もつと頭つうがするといふやうに直うちがさがり兎角男のよしあしをいひいやらしき目もとして手代小ものを相手にしてヒやらくらいふたあげくには浮名のたつやうな事が出來あたら息子や娘でも敬がなけりや明徳のもと直がきれて買人はさて置つまはしきする事ぜかしさて手代小もの下女なども何れも奉公する身には奉公の直打相應に手代なれば世間から見ても手代らしうあの勤めぶりでは隨分一家の主とも成べきつとめかたなりさだめて仕出すであろふと十目のめがねにかゝり小もの下女もよろづすなをに尻輕く柔和なればこれも他から目をつけてこちの長太郎から見るとむかひの若松どのはよはゞ上出來じゃ隣りのれさよどのも見あげた人じゃこの夜の短いに朝はひとり眠があいて起るげな又家内の雜用などにも氣を付ていさゝかのものもすたらぬやうに取あつめするさうなとみな世間から目をつけて手代小ものは他家より養子に望まれたり或は主家の養子となり首尾よふ別家するもあ

り下女もこゝろの器量を見こんで嫁にもらひに來る皆もと直から利德を得て身の修りをするやかし又奉公も仕よふにより第一に骨をれしみ肝心の家業に身を入れず主人のつかひに出ても小宿這入に時をうつし其癖酒も好き色も好にて隱し妻をこしらへ置あるひは近所の娘や下女をちよばくつたり小息子をろゝなかして辨けいやらひちやし坊やら金のやりくりに主人のもので不實商ひにかゝつて我身をわが手に引倒すなり又小ものもこんな手代を見ならへばすねたりいぶりかわいたり間がな透がな遊びたがりつかひにやれば半日づゝ飯からめしまで遊んでもどるまだろのうへに小づかい錢までは少し髮へ買やひやらつまみぐひやら三日にあげず小便たれかゝつた事はなけれども主人は慈悲な心からどうぞはんまの人間にしてやりたいと世話してもかひなき身もちは是非もなし又下女奉公も同じ事いまの女中は大かたが御家さま遣ふがれはひろうな烏渡した事にも隙をかき養父入休みはさだまりの日かずが立ども戻ばころ宿のみこ

ませ腹いたじやの風ひいたのと偽病遣ふて四五日も日をのばしては手が
ら顔いさゝかの給銀は小づかひと芝居とにみなうちこんで肝心の身の片
附のこしらへはうはの空吹心地にて近所遊入しかげ口には親かたろしる
が仕事にて半季づゝにて主人をかへまだろのうへにものわすれとどうち
くはうまれつきのやうになりれしてもこゝでもうでかばころ大きな尻の
れもたきは實に見ぐるしきものぞかしこれらの身持をする奉公人は明徳赤
子の元直がさがり何はどまけふといふて見ても直の附人もなく目ながひ
主人に見放されあちらへ十日こちらへ半月住こんで何して見ても根はと
げず實に幼少より大恩うけし主人へは何ひとつの功も無かへつてあだの
不奉公年老給ひし両親をやしなふことはさて置て苦に苦をかけし其うへ
にまた両親にやしなはれ不甲斐ないともあはうとも名の附様もなき身と
なれば親類からも氣の毒がりれや助にもならふかと少々づゝ合力し裏店
かつて小商ひさせて見ても仕こんだ蕩子の癖づきて貧乏さへもながふは

つゝかず實に本心の本直がきれては生涯れもひばかのもかぬものなりて
れまへにとり越して遊んだむくひの來たるなり故に人々身に立歸り兎か
く本直のきれぬやうねき代呂ものにならぬやうれろれつゝしみ給ふべし

大一人者不失二其赤一子之心一者也

古歌

人はたゞいとけなきよりまとしくたゞしき道を見聞てぞよき

殷の湯王といふ聖人は毎朝湯をつかひ給ふ盥のふちに銘をしるし日々身
の垢をあらひ給ふときに心もろのごとく舊く染し汚を洗ふべしと自から
いましめの給ふ言葉にてげにありがたき事ならずや雖しも風呂へ入湯を
つかへば身も清らかにさつぱりとこゝろよくなるこれは外がきよらかに
なりしもへ外清淨といふものなり又人欲身勝手の心の垢をあらひれとし
本心のひかりを出せばうちがきよらかになるこれ則内清淨となるなり内
外一致して内外清淨となれば眼よりも人欲諸のけがれはいらず耳よりも
人欲もろ〳〵のけがれはいらず鼻よりも人欲もろ〳〵の汚はいらず舌よ

りも人欲もろ〳〵のけがれいうけず身にも人欲もろ〳〵の汚をうけず意も人欲もろ〳〵のけがれをおもはず六根とも清淨となれば五臟の神君安寧にして天地の神と同根となり萬物の靈と同体となればよるづのねがひひとつとして成就せずといふ事なし洗ひ給へ清めたまへ誠よ心のあかを洗ふはかはぎまでいさぎよき事なるを世の人うかとして居るい何事ぞや心に垢氣のない人はかへつてあらふ事をよくしれどもとかく垢氣の多い人い洗ふとがきらひにてだん〳〵つもればついあらふたくらねではおちず灰汁桶までもつけねばならぬたとへて云はゞ世界中はのこらず灰汁桶のやうなものじやけれどうつかりして居ると氣がつかぬ男女とも七八ッぐらゐより學校に入れ手ならひ稽古にやるこれは手ならひやといふあく桶へつけ置て不行義な事せぬやう大口や惡口いいぬやうおとなしう成人さす灰汁桶なり又いろいろの讀本や修身書などの小冊も心に垢のつもらぬやうとのを去へそれから少し年が長ると素讀などい心のあかをおとし身

の行をたゞしくするに至極の灰汁桶なりあるひはうたひなどもよく心をとゞめて會得すれば垢氣のれちる灰汁桶なり諺に人のふり見て我振なをせと人の善惡邪正はあきらかに見もるものゆへもし人の垢氣の多を見ば我にもかやうの不義不埒の垢はたまりはせぬかと我身に立かへり改め見るべし亦人となり孝弟にして垢氣のないよきれてなひとみるならば我もかくころありたきものと速かに行ふべしこれ則世界中が灰汁桶のしるしなり又女中も縫はり片手には掟諸禮式の稽古などは身を正しくするとゝもへれのづから心の垢もれちて正しくなり年頃にもなれば嫁入し夫の家へ行ば夫はいふにれよばず舅姑小舅小姑などに事るも灰汁桶の中に居るやうなものでろれは惡しいこれはてふじやと氣をつけて貫ふ度ごとにうれしやすま〳〵の行といかぬ垢をとれと教へて下さると眞實にありがたくれもへばこゝろの垢がきつぱりとれつるものなり又世間をみればまれには徒な娘や端手な内義やたしなみすぎる後家などは見よからぬものなり

みな心に垢の溜るゆへその垢が身よわらはれてうき名のたつともあるぞかしかならずつゝしみ給ふべし其外假名艸紙繪草紙芝居までみな勸善懲惡の趣なれば見やう次第にて灰汁桶ならずといふ事なし亦家内にてはかみだなも灰汁桶なりいかなればかみだなへむかふに心の垢ありては神佛とも納受したまはずゆへに神樣にむかふときい誰もしばらく無心無念にしてこゝろに垢氣がすくなし

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さて日本國中津々浦々迄も教育の勅語を下したまひし莫大の御仁澤すへの末まで潤ひ四ツの海鄙なる　御代にうまれわはせし國恩のありがたさをわすれずこゝろの垢をあらひ家内和合しくらすこそ農工商の道ともいふべし實に前後左右が灰汁桶だらけなれどそつとよけてとはる人がれはひ耳ぢかひ淨るりでさへ灰汁桶の文句がまゝあり彼太閤記十段目の文句に御いさめもうしたろの時にれもひとまつてたまわらばこうしたなげきはあるまいにと今は世間にこの十段めの文句がれはひ或は番頭手代丁稚まで親請人がれいさめもうしたろのときにれもひとまつてたまわらばかうした暇は出まいもの亦息子でも両親伯父叔母親類別家が御いさめもうしたろのときに思ひとまつてたまわらばこうした勘當はうけまいものまたは嫁でも里の両親兄姉や媒介までが口ろろへれいさめもうしたろのときに思ひとまつてたまはらばこうした三下り半はとるまいにと世に武智の餘類がたんと有つゝしまざるべけんやろの武智の餘るいを見ても心の垢をあらふとはせず灰汁桶見ても蛙のつらへ水かけたやうにろしらぬ顔して居る横着ものが多またあまり垢がつもつて泥まぶれのやうに成つて居るものはすれあふてもさわつてもよごれるろのやうな大垢は世界の人の難義する事もへ恐れ多くも所の御役所より御役人樣方出させられかた

のごとき汚れの多いものを御吟味なさるゝ事じやうな大垢大汚は身うできもならぬやうなきびしい灰汁桶へ入らるゝ事もあるうな金輪際しみこんだ大垢は灰汁桶でもれちずよごきなくもんで〳〵もみやぶるもあり果は油雑巾のやうにちぎれ〳〵となり犬や烏がくわへあるくにも至るれろるべし身の垢や衣類の垢はついれちもしやうがこゝろの垢はれちにくいこれも少しのよごれのうちにつまみあらひでもすればれちもしやうが大汚は解分ねばならぬろう成ては大ろふなものなりゆへに心のゆく備はいかように成もしれずたい〳〵戦々恐々とろのひとりをつゝしみ心を學ふときは大垢はたまらぬものなりみなこゝろの掃除がゆきとゞかぬから日々にあられたに掃除しあらひの事なり唯日にあらたにろうぢしてあらひ亦日に掃除しあらひあらたなれば生涯垢氣のたまる氣づかひはあるまじまた生れながら垢氣のなきはよけれどそれは賢人以上の事ゆへ甚だすくなしいづれ少々のよごれは心學のあらひはり本心の湯のしにかけて仕立

直せば大てい人中へ出らるゝくらゐにはなるものゆへ兎にかくにも聖賢心法のをしへによりて本心の片はしをもしりわきまへ心のあらひはりをなしたまへと希ふ而已

湯盤銘曰苟日新日日新亦日新

古歌

はらのうちに垢のたまりし言の葉は
のりだちのせぬものにぞありける

不仁者とは人欲我慢増長し不忠不孝不義または不埒放蕩惰弱ろのうへ人をむごくしどう欲に當る人はともに交りのならぬといふ事なりこれらの人はわが身のあやふき事をこゝろに思ひ身にれこなひて安心のれもひをなし害を乞ひわざわひをまねく工みをなして利口顔してろの身もはやく亡び家も斷絶し先祖の墓所に香花の絶るやうな手だてをこしらへろれをたのしみとするゆへ人の風上にも置れぬなり不仁は佛家にも殺生戒とて佛はつよくいましめ給へり殺生も不仁も同じ道理なれゆへ殺生といふが耳

に入よいさて殺生とゝ無益にものゝ命をとりあるひはいためくるしめなどし増長すれば世の害ともなる彼下野國那須野の原に殺生石といふ石あるよし世に名高く云あらゝせる所なり天竺にては班足太子の塚の神唐土にては周の幽王の后褒姒我朝にては鳥羽院の御時玉藻前とて三國を惱せし野干とかやいづれも皆女の姿となるこのはなしは畢竟根なし事なれど色欲をいましめん爲のたとへなり實に一たびかへりみれば城を傾けふたゝびかへりみれば國を傾くと色欲のわざはひもつとも大なり愼まざるべけんや此色欲のわざはひもはじめて婦人を見し時はさして思ひもなかりしが偖もやさしそうな形ふりじやと念が生じその念に念が相續して終にはわざはひの端となる故に惡念相續し凝て石の如く成を殺生石ともいふべし人の腹のうちに此殺生石生ずるときはものゝ命をとる事限りなし或ひゝ出所不儘なよもしれぬ婦人に戀慕ては天地に等き親に見かへ彼をばうちへ入たくなり父母ころ早うまいられいでと親の死るをまちかねる殺生石もあるやらんまたは馴染し女房やいたいけざかりの子にまでも見かへて妾に通ふもありぬしある婦人や娘までろゝのかしたゞましたりあまつさへつれて欠落する不義亂倫の殺生石主人の金銀引負し我身の罪はいふも更也親受人の身にまでも首枷手がせの入ゆかし世に類ひなき殺生石或は博奕不實好我とわが身を責さいなみれのが苦痛のたねがたさに不便や妹や娘までうき川竹に沈められ浮ぶ世さらになきに至る殺生石のわざならずやまた名聞利欲にまよふては性にもあわぬのゞみをなし親先祖からつたわりし家業を餘所に見なしつゝ山や海の相談にはまだ手にとらぬさきよりも十文握た心地して樂むうちに片はしからくれつき出して一も二も三文なしの身となりて親類緣者知音までも住なれし處にも居られぬやうな目に逢す殺生石もあるゞかしあるひは血氣の若ひちや遠

いろいろのたわけたわざゝ親の心をいためるは殺生石といふ思はずや何よりかより殺生のその源は両親に苦をかけるようへはなしかくさま〳〵のせつじやうも寄來る人に難儀をかけ世の害となる殺生石は天より受得し仁義の心もいつの程にかなすの丶腹それゆへにこそ不忠不孝をなすの丶はら不義ふらちをなすの丶はら放蕩惰弱をなすの丶はら親のゆづりは何千万圓の身代もれどりの爲になすの丶原節季其餘の取引にも無理ばかりをなすの丶腹一家親類へはれはくの不義理をなすの丶はら家やしき諸道具までも人手へ渡玄てなすの丶原家内の召仕もはつ〳〵へつてなすの丶はら終には衣類や夜るの者までもなすの丶原果はとう〳〵雨露を防ぐよすがもなすの丶原

のはら住居あたら心を不仁の道へ行衛しれずに成ゆくもの也さりながら野干の變化せる殺生石すら玄翁禪師の教化によつて佛果を得ると云つたへたりまして況んや固仁義禮智の性をうけ得し人なれば神の御心にしたがひたとへ惡念の殺生石にもせよひとたび我身の先非を悔み志しを改むれば人の道にも至るべしされども輕く思ひとりては已前の人我めつする事なし是をたとへて云はゞ今年い暖かな冬じやくらしよい寒じやなどいふとしは當時は凌ぎよけれど來る年の作もの稻も綿も麥も菜種も虫附て出來がわるしこれ全く寒氣緩くして地中の虫滅せずつぎの年へたねを殘すゆへなり人も悔こゝろ緩ければ人我の地むしめつせずして惰慢の芽をからすなり亦雪や氷がはりつめて人馬の通ひが留つたといふやうな寒氣のつよひ翌年は果して五こく菓までがよく實のるなり是地虫めつして種をのこさぬゆへなり誰も道に至らんと思はゞ大に憤を發し思ひをこらしひとゑび自己の本心をしらでやは置べきかと晝夜間斷なく見聞格知行住

座臥の主は是何者ぞと工夫すべしされども容易しれざる時は退屈し身心ともに勞るゝなりろの苦勞のうちに人我の地虫滅するなり右工夫中の苦心に寒氣のつよきにたとふさて絶ず修行すれば程なく固有本心の實体を自得すべし自己の本心を自知すれば人我の地虫とく〳〵くめつし悪念の殺生石變化し仁は人の安安義は人の正路に出るの端を得べしかく人我滅し無我の本体にかへれば君臣父子夫婦長幼朋友の交節にかなひ家内和合し子孫永續うたがひなきものなり

不仁者可与言哉安其危利其菑樂其所以亡者人欲の石よりかたくなりたるも本心しれぬ穴ぞあきぬる

神道教訓

心の行衛下の巻 終

神道教訓

心の行衛二編上の巻

伊澤孝雄編輯

○都て人の行といへば五倫の交り君臣父子夫婦長幼朋友親類知音の人より家業体世間の附合に至るまで程よく道にかなひたるを人の行といふ若其中にて聊にても意にかなはぬ事亦我は情一ぱい勤ると思へど向ふの氣にいらぬ事などある時は皆吾身に立歸り心を正しくし意を誠にして向ふときは何れも和睦せずといふ事なしかるをなべての人多くはわが身に立かへる事を忘れて向ふへ目をつけ恨み腹立あるひはいかり罵しるも亦に主人父母夫舅姑などのきげんをろんとうとく成行ことぞかし亦朋友知音世間のつき合にれねては長きうらみをむすぶにもいたる是皆意が向ふへはしりて吾身に立歸る事を知らず全く手元くらしといふものなり徒然艸に貝をれはふ人の我手前なるを置て餘所を見渡して人の袖の影ひざの

下まで目をくばる間にわが前なるをば人に覆れぬよくれはふ人は餘所まで わりなく取とは見ねずして近きばかりをれはふやうなれど多く覆ふなり亦萬の事外にむきてもとむべからず唯茲もとを正しくすべしとあり誠なるかな身を脩め家を齊へ國天下を治るも身の行ひを正しくし徳をしくにはしかじとかや或歌に　「吾よきに人のあしきがあらばころ人のあしきはわがあしきなり兎角己に立歸り身の行ひを改むる修行こそあらまはし昔唐土に二人の獵師打つれ山中に狩しけるが朝まだきよりかしこの峯こゝの谷間と狩くらせども何ひとつの得物もなしあまりの事に身もつかれ樹の根にこしかけしばらくいてひけるに遥向ふの峯づたひに鹿ひとつ矢を射ごとくはせ行つゝいて跡より大ひなる虎彼鹿を目がけ追行有さまなり二人の獵師は目たゝきもせず眺め居れば鹿は逃るに道を失ひ數千丈の谷間へれちたり元より此谷そこは巖の立ると劔のごとし虎も鹿に目をつけし事もゑ同じく彼谷底へ落たり二人の獵師是を見て鹿も虎も定めて巖

につらぬかれ死せるならんいざや此両獣を取んと両人とも谷間にはせ行はるかに谷そこを見下せば案にたがはず鹿も虎も朱にろみて死したるやうすなり両人は大ひによろこび骨折なしに両獣を得る事よと萬かづらをたよりとし難なくかの所にいたりしかと虎を得たり両人とも腰に附たる用意の細を取り出し一人は鹿を背負ひ一人は虎を負ひ力わしを踏んで元の道へよぢ登らんとすれど劔を立たるごとき巖ことに苔なめらかにして容易登り得ん事覺束なしされども両人たがひに聲をかけ力を盡しよぢのぼり半途までいたりしが一人云やう是よりさきに猶甚だけはしき所あれば所詮登る事難からん彼所にいたつて身を失なはんよりは吾は此鹿を捨て身を全くし歸るべし汝はいかんと言ければ今一人のいわく寶の山に入て手を空しくする事あるべきや汝は兎もあれ我は此まゝ取かへるべしと答へけるゝゑ先の獵師は鹿を捨て先達て歸りけるあとにて一人思ふやう虎を得る而已ならず彼が捨し鹿をも得る事のうれしさよと亦鹿をもともに

せれひ藤かづらを力にし登りけるが前に云し難所にいたりていがゝしけんふみはづし數千丈の谷そこへ落て微塵に成りてゞ死したりけるとなん此はなし甚だ面白し其はじめ虎は向ふの鹿に目をつけ己に立歸る事をわすれて死し獵師は鹿と虎とに目がつき死したりてれ全く向ふへばかり目がつき心の行衛を見失ひしゆゑ身を亡ぼすにいたる恐るべきにあらずや亦ひと度は危き場所に至れども己が力の分限をしり欲を離れて立歸りし一人は無難なりし是則ち道によりて己に立歸るとひかふへ意の走るとの違ひにて生死の分れとなる慎しむべし〳〵世の貴賤とも此立歸ると立かへらざるとによつて身を亡ぼし家を失ひし例指を折にいとまあらず茲にれかしき咄あり或所に至つて闇しき姑ありて時々嫁をいぢりける嫁はいつもあい〳〵どれとなしく誤り入て居けるが或とき姑田薬粉を呑ながら嫁をがみ〳〵いふ折から吹がらをれとし壷がくす〳〵やける下女は庭で釜からめしをうつし居けるが壷のやけるを見てあの鬼婆がとながめ入て

飯がひつの外へこぼれるもしらずうつしてゐる下男は草鞋を作り居しが下女がひつの外へ飯こぼすを見てあの下女の安房やくたいもないと詠めて入て草鞋を造りあげて見れば紐通すちゝがなかつた是等も皆向ふへ目を付てわが手元がれ留守になりしゆかし譬へ何はゞ博學多才たりとも己が身に立歸らざる人は小人に異なる事なしある所に儒を業とし門弟を教諭しける人ありしが例年冬の中に遠方の年始狀をしたゝめたかれけるがいつも内宝は封の手傳をいたされ數をよみ片づけられし時に例よりは數聊減じありけるゆゑもし失念にてはなきやと尋ねられければ主のいわく成ほど少々減じあるべし例年此方より遣せども先方より返事もなく失敬の人々もまゝあるゆゑ其分は當年より止に致せしと言れければ内宝いとしづかに申されけるは先方の不敬に目をつけ給ひろれを手本に見習ひたまはゞ其人もともに不敬の徒とならせ給はん平生の御しめしにもれのれに立歸るは君子の道なりとうけたまはり候ひぬといさめられければ彼儒者

大ひに慙愧し其方の諫めなくば我かならず小人の儒と成らんと深く恥られしとかやなべて世の人の有さまは皆向ふへばかり目をつけ彼もがめば我もまたもがむべしともがみくらべする人多しいづれの親も子息やむすめよかれがしと思ふ慈悲より夫はあしく是はよからぬと其もがみをため直したまふを夫とはしらず無理ばかり云親じやともがんでかゝりすねたりいぶりかわいたり亦主人も召つかひ手代から丁稚にいたるまで悪人にせまいと息精はつて善道へ導き給ふを無理は主人の常なもゝへらず口にものがんでかゝりあるひは舅姑が世帯のためよかれがしに日々の雑用にけんやくを言るれば嫁はきくからもがんでかゝり此方の舅姑はあのやうにしはん坊に成て銭金もつて死ぬつもりか欲にはかぎりのない老ぼれと返事さへろく〳〵せずあまつさへ乳母や下女を方人にし叱り役の姑なら耳持た不祥に聞ひてやれと悪口まじくらもがんで居る兎角世にはもがんだ者が多ひ其もがんだ同士は目だゝぬやうなれど聖賢の目からはさて〳〵

見ぐるしいと不便にれぼし召し汗みづかいての御苦労なれば少しは聖賢の道によつてれのれに立帰り直なる行ひをなし給へかし

孟子曰行有不得者皆反求諸己

古歌

鶴山人のしがからさき見へてわが身のうへはかへりみづうみ

扨善事を積家にはかならずあまる慶あり悪しき事を積家にはかならずあまる殃ありと亦天は善に幸ひし悪に殃すともいへり其善事も数多あれど忠孝にますよき事はあらじ故に君に事りて己を盡しわが本心を不欺を忠といふ親に事りてよく其力を盡し片時も親の事を忘れざるを孝といふ朱子も既に孝は天下の大道とも言り且長につかへてよく順ひ能敬ひ己を盡を弟といふ皆本心の誠より出て行ふ孝弟忠信なれば天地の冥加にかなひ種々喜びのきたるも是自然なり孝弟の人は萬にわたりてれのづから道にかなひ先祖を尊み親類知音の人にもむつまじく鰥寡孤獨を憐み萬物を恵み吾身のけんやくを専にし行ひ人の手本となり家業繁昌子孫永續しよろ

こび無窮樂限りなし是全く善事を積ひゝへなり亦不善事を積家とは不忠不孝より大ひなるあしき事もなし君につかへて忠ならず親に事へて孝ならず長につかへて順ならざる人は天地の道にさかろふゝへ忽ち殃身にかゝり貧窮患難病身短命あるひは妻子にはなれ亦は水難火難にあひ子孫斷絶にいたる事目のあたりなり善と不善とのわかれは黑白をわかつよりも明らかにしれたる事を人欲身勝手の目からは見分がたきを哀しきをならずや我慢身勝手の人は必ず不善を好き身を亡し家を失ふ孝弟の人は善を好き身修り家齊ふ善惡とも氣習によつて好不好あり或國の君馬を好み給ひければ家士より追々よき馬を參らせけるがよき馬を獻せし人へは殿も目を置たまひ何とやら出頭の摸樣に成りけるにそやかて君馬を好給ふ事をふつと止ぬ近臣其故を窺ひければいやとよ何事によらず好きには取るゝと仰られけるとかやげに有りがたき明君と世擧て是を稱しけり誠や好には取れやすし殊に人我增長の小人の好は先第一に我慢好天狗すき扨此

天狗好は何れの藝にも多くある事にて殊さら近頃木の葉天狗澤山になりて有頂天まで飛あるくに似合ぬ脚半わらじ何分つまらぬ人の成事あきらかなる羽ありて飛あるき身がるき手合に甚だ多しさて天狗を畫しを見ればりまだ其うへ多いが貪欲すき耻かき好客嗇好不忠好不孝好酩酊好妾すき遊所好囃子すき芝居好淨るり好伊達すきされごり好貧乏好殘忍好殺生好大食好朝寐すき偸懶すき肝積すき不實好博奕好僞好勘當好氷の暇すきなんぎ好乞食好是等を好人はかならず積不善の人也夫に引かへ同じ好でも忠義好孝行好誠好禮義すき家業好正直好堪忍好儉約好つゝしみ好立身好神好聖人好

隱德好極樂好夫婦兄弟むつまじ好慈悲好あはれみ好是等をすく人は積善の徒なり右の中にて我身の行を引くらべいづれを好て意の主として居るや身に顧てもし不善の行ひをすき居[illegible]ならは急々改め慎しむべし唐齊の景公は馬千駟ありとて四千疋の馬[illegible]し大國の君なれど死する後民より譽稱すべき德なかりしとかや伯夷叔齊といへる君子は

首陽といへる山の麓にて餓死し玉ひしかども民今にいたるまで是を稱せざるはなし是其行ひに善と不善とあるしるしなり彼山焼の謠ゑ岸林に骨を打靈鬼泣々前生の業を恨深夜に花を供ずる天人返す〳〵も幾生の善を喜ぶとあり岸林は寒林といふ説もありて天竺にて死人を葬る所なり骨を打靈鬼泣々前生の業を恨むとは世よありし人死て惡道に落入苦み堪がたきまゝ前生の我骨に看て我世にありし時此の體にて不忠不孝偷盗邪淫殘忍放蕩惡口食言妄語綺語貪欲瞋恚愚痴にして殊更聖賢の道ゑよらず神の教を聞ざるゆへ今此苦みなりと泣々我骨を鞭て後悔悲歎の有さま是全積不善の報なり亦深夜に花を供ずる天人返す〳〵も幾生の善を喜ぶとは一人の天人來りはなを捧げひとつの白骨に向て禮拜ス我世に[illegible]時奉公ゑ私せず親に孝養を盡し家業出精し堪忍を守り生涯慎み勤し德によつて今天上に生を受樂む故我白骨に花を供じ禮をなす是則積善の報なり去なが

ら後世の事と見るは甚遠し萬箇目前の境界なれば今日の上にて見るべし或は主人に事て奉公に蔭日南し種々の放蕩惰弱に身を持くづし終には主人に見限られ世に住便なさに仕付もせぬ働きに骨を粉にし身を碎き三伏の夏には終日熱湯のごとき汗に身うちとろけ

亦嚴冬の終夜雪霜厭はずかけ巡り足よりは血を流し其いたみ堪がたく

剩へ人の子者下女までに腰を折り吾口ひとつの養ひに其苦勞いふばかりなし其とき我身に立歸り後悔してさて〳〵悔しい哉主人の家にて奉公精出し勤なば今頃は外別家並に仕附てもらひ相應の渡世も出來妻子を養ふには何の苦勞もなく安樂に暮すべきに今朝夕の烟をさへ立かねる身のうへと成はてたるゑ悔しきと涙とゝもに千悔萬歎する是則寒林に骨を打靈鬼泣々前生の業を恨に何ゑ異ならんや亦人の子たる者も親の家督を相續し家業出精せば親も安堵し身も脩り親類までも喜ぶに左はなくして心の行衛を見失なひ酒と色とに身を蕩

し先祖親の恩を忘れ悪事日々に増長すれば両親ももてあまし涙ながらの勘當を息子は血氣の若むちやにて親を捨る事はやぶれたる草履を捨るよりもいと易く思ひかくさつぱりと身ひとつに成たればどんな事しやうが誰が點のうち人もなしと横着無頼の悪者と成何處彼處のいとひなく喰たをし呑倒し世界の厄介と成終には莞莚やむしろに身をまとひ箸一せん腰にさして日本國をかけ廻り或ときは野にも臥亦は山にも夜をあかし雪霜に身は凍へわが口ひとつ養ふ事の出來ぬころ先祖やれやの罰ならん其時やう〳〵目がさめて吾身の以前をかへり見れば大阪の何町にて何屋の息子とて人にもしられし此體今かく非人と成果ては悔みてかへらぬ事ながら親や親類別家まで寄てかゝつて異見せしろの時心を改めなばかく乞食までには成まいにあら口れしやと先非をくやみ涙で體がうくはどになきあかしても今さら甲斐のあるべきや是亦寒林に骨を打靈鬼なく〳〵前生の業をうらむにあらずや或歌に「骨も身も野ばらの土と成ものを何にするらん欲面の皮さて亦息子も奉公人も親主人に事るに忠孝を專らにし「己を盡し人に謙り身の勤に精出し堪忍づよく　御法度を恐れつゝしみ堅相守り我より下たる人をあはれみ朝は人よりはやく起夜は人にれくれて寐年頃怠りなく勤しもろ主人の御蔭にて別家しあるひは親の家督を相續して家業日增に繁昌し子孫もみなれとなしく生立年來の功つもりて隙居樣と仰がれてさて〳〵うれしや吾若年の昔より晝夜をわかたず勤め働きし寸功にて今此大安樂にくらす事の有がたさよと觀喜するは則深夜に花を供ずる天人返す〳〵も幾生の善を喜ぶにあらずや故にかならず死て後の事と思ふべからず萬箇目前の境界なれば地獄極樂は唯生涯の我身にあり思ひ誤り給ふべからず歌に「極樂ははるけき國とさゝしかどつとめて居たる所也けり故に善事を積し家には絶ず喜びの來り忽極樂住居となるなり是を仁は人の安宅ともいふなり亦あしき事をつみし家には明暮わざわひの來るものなり

道なればたとへ冥々の中にもあしき事をせず思はぬやうなしたまへかしと希ふ而已

善悪の報は全く天理自然の

積善之家必有餘慶積不善之家必有餘殃

さまざまのれしへはあれど悪をやめ善をするよりはかにみちなし

岸林打骨靈鬼泣恨前生之業
深夜供花天人歎喜幾生之善

學問の道は其放心を求めよとは學問の本源を示したまふ事にて人と生れし者學問はせでかなはざる事なりいかんとなれば學問といふは文字ばかりを學ぶ事にはあらず其源は心の事なり何はど聖賢の書をよみても我心昏昧時は其意味通せずして寸益もあることなし故に放心と昏昧迷ひし心の行衛を求め本心の光明をあらはすを肝要とす人の心は事物にふれて移りやすき事は火の乾るに附水の低きに隨ふよりも速にして須臾の間に心の行衛を見失ひ思ひもよらぬ事の出來る物ゞかしつれ〴〵草に筆をとれば物かゝれ樂器をとれば音をたてん事をれもひ盃をとれば酒をれもひさいをとれば攤うたんことを思ふ心はかならず事にふれて來る假にも不善の戯をなすべからずと誠なる哉眼は見るに移りやすく耳は聞にうつり鼻は匂ひに移りやすく舌は味ひにうつり身は觸るにうつりやすく意は思ふにうつりやすく譬へば猿猴の梢より梢にわたり或は野馬の馳るに異ならずむかし粂の仙人は物あらふ女の脛の白きを見て心うつり通力を失なひ落しとかや是全く心が放心とせしも乏也物事にふれて放心とするも多くあれど世の人の放心と迷ひやすき　色欲に勝るものなし

老たるも若も智あるも愚なるも替る所なしとゞ見もされば女の髪すぢにてよれる繩には大象もつながれ女のはける木履にて造る笛には秋の鹿かならず寄とゞ言つたへ侍る自らいましめて

恐るべく慎しむべきは此まどひなりと兼好つよく誡しめ置給へり或人のいへるは近き世參河國に宇都の山人都に登り名高き遊女のはける木履を取歸りて笛につくりて阿部の山中に入て是を吹に鹿多く寄事つねの女のあしだにて作れる笛よりもすぐれたりと語りけるとなり

詩經にも亂匪降自天生自婦人とてひとたび顧りみれば城を傾け再びかへりみれば國を傾くと言り恐るべきにあらずや殷の紂王もあまたの臣下及び億兆の萬民をくるしめ妲妃一人をよろこばし天下を失ふ周の幽王も褒姒一人のみを喜ばし四海亂る亦唐の玄宗皇帝も明君のきこえ有しかども晩年にいたり楊貴妃の色に婬れ迷ひしなり漢の司馬相如もみづから文をつくりて色欲を警むといへども卓文君の情には愈〳〵迷へり是等も皆智ある人々なれど末代の誹にかへて一人の女を喜ばせり吾朝にても昔より名將と呼れし方も臣下萬民をくるしめ一人の婦人を喜ばし末の代までも名を穢せしは數ふるにいとまあらず亦農工商も是に異

ならず芝居狂言などにもかならず此警しめあり藤屋伊左衛門は親及び親類別家の者までくるしめ夕霧といふ傾城一人を喜し七百貫目の借金して剰へ親の勘當まで受しなり龜屋忠兵衛は梅川といふ遊女をよろこばし古手屋八郎兵衛はれつまをよろこばし刀屋新助はいろはをよろこばし椀久は松山をよろこばし久松はれうめを喜し小性の吉三はれ七を喜ばし帶屋長右衛門はれはんをよろこばし井筒や傳兵衛はれしもんを喜ばし紙屋治兵衛は小春をよろこばし山崎與五郎はあづまをよろこばし是等の族はあるひは主人の金銀引負し難義をかけ且は親兄弟を泣し一家までの顏をよごし唯ひとりの女をよろこばす不義いたづら殊に惡名を末代に殘し物わらひの種となるは安房とやいはん亦禽獸とやいふべき誠に論の限りなり

古歌　世間はれぬ戀する人はくらきより闇き道にぞまよふなりけり　後

の世も哀なるかな里の犬打ぜもさらぬえにしなりけり亦同じ喜すならば親主人夫舅姑を喜ばすは人の人たる道にして天道の冥加にかなひ立身

波達も思ひのまゝ成べし古へ唐土の虞舜は瞽瞍といへる頑なる父握登といへる闇しき母亦象とて奸佞邪智の弟と三人もろともさまゝの姦計をなし舜を幾度か殺さんとせしかどもすこしも是を不恨してよく両親につかへ傲る弟を憐み終には両親及び弟までを喜ばし亦君たる帝堯に事忠義を盡し二十八年の間政を取て四海億兆の萬民をよろこばし玉ひしゆゑ大聖人と仰がれたまふ亦曾子といへる御方は孝養の道を盡し其親を喜ばし給ひ且は世の人に親を敬し兄を敬し君を敬するの道を廣く天下に傳へ給ふは吾一人の敬より千萬人悦ぶ是人の要道ならずや故に四海に孝を以て名を揚給へり唐の崔愬の妻唐夫人は子に與ふべき乳をもつて姑をやしなひ喜ばせしゆゑ孝女とて嫁の鏡と成亦吾朝にても忠孝を以て主人親をよろこばし名を後世にあげし人是又少からず既に佐藤次信は八島の合戰に主君義經公の危き場所にて能登殿の矢表に立討死し主人の命に替りよろこばし奉るゆゑ今に至つて忠臣の鏡と稱譽ゞかし亦忠臣藏の狂言にも大

ぼし出良之助はじめ四十餘人千辛萬苦して主君の讐高の師直を討其靈魂をよろこばせしゆゑ世に忠義の譽たかし人皆仁義の心を備はりたれば賤き身にも忠孝に名高き人々あり近き世に越後國魚沼郡十日町村に住る浪人渡邊森右衛門の下部八藏は分て貧窮の主人につかへて四十八ケ年の間晝夜のわかちなく家事のいとなみに粉骨碎身し種々の艱苦に身命をなげうちて忠義を盡し主人を喜ばせしゆゑ公の御惠にあづかりぬ亦同じ頃河内の國日下の里に樋夫清七とてきわめて貧しき者あり母につかへて至孝なり其母むかしは或富家の乳母たりしかば今まづしき世にありても口には榮耀なりしが此清七母の好める品をすゝめたく思ふ孝順の心より朝は人よりも早くれき山に入木を樵夕には人並より後れて歸り他の人の二人前をはたらき其一人前は常のまかなひにあて殘りひとりまへの働き代をもつて母の好める物をとゝのへすゝめけり或日母鶉のあぶり物をのゞみたりしに其日は暮に及びたれば明日なんとく起て浪花の市に行て求んと

其用意しけるに窓に何角物のあたる音しけるもゑ盍等の戯れならんと思ひながら出てみればうづら二羽落てありければ喜びてとく母にすゝめけり孝の誠にいたればかゝる不思議もありとなん是則ち至誠にして不動者は未有之謂歟其外孝義錄れよび諸國の忠臣孝子いづれも親主人をよろこばし國君の御惠みにあづかりし行狀皆など數へなば春の日も是に足らず同じ喜ばす中にても出所不慥な女を喜ばし終には身も家も亡し失ふもあり主人親舅姑などを喜ばし末代人の鏡と成もあり誠に天地懸隔のたがひならずや右等の心得ちがひは何によつてかくなるぞと工夫すべし是全く意の事物にふれて移り放心と取るゝよりかくなるぞかし

或富家の子息謠會などの歸りに朋友に誘引れ不思も遊所へ行しが段々面しろく成て度々通ひある藝子になじみをかさね二世も三世も女夫の約束夜昼のわかちなくかよふもゑ兩親もびつくりして種々異見すれども何ぶん彼藝者が目のさきにちらく見もるやうで片時も忘られず何をしても手につかず狐つきのやうになり急度異見すればどうやら無分別でも出ろうな樣子もゑ家の番頭主人大事と思ふ忠義の心から若もの事が有ては一大事と不承知な兩親をたゝきつけかの藝しやを根引にし懇意の醫者を仮親とし表むきの婚禮すみて夫婦ひつまじく暮し居けるが右の藝者ふと風の心地と煩ひつき種々さまく手を盡し養生させてもしるしなく病日々にれもり終にはかなく成ければ息子は掌の中の玉を失し心地にて居間へ引こみ晝夜泣くらし居けるもゑ番頭亦々心配しあのやうすでは氣やみでも出てはならぬと思ひ早速寺へ石碑を建墓まいりをさせ氣を轉せんとの思はく也息子も墓參りと聞てせめて彼が追善にもと毎日かゝさず參詣しけるが或時思ふやう未練ながらも最壹度かれに逢ひたいが芝居などでは幽靈に成て逢に來るのもまゝありどうぞ幽靈になと成て逢に來てくれまいかと種々の思ひに迷ひを重ねし意から世に聞傳し反魂香とやらは一度は魂を反すと聞り何

卒反魂香をたき焚て一目なりとも逢見たいと出入の者を密に招き彼反魂香を調させけるが此使の男至て横着者もへ埒もない香を調て反魂香と偽り大分の金を貪りぬ息子は眞黑に迷ふた意から一圖に彼香を墓へ持參し石碑のまへにたきて信をとり守り居れば不思議や石塔がもさ〳〵動くさては奇特があるうなと思ふうち香はすがつて消へければ石塔も動き止むやれ〳〵殘念今少し香があらば奚なりとも見るべきにと力を落せしがいや〳〵明日は香を澤山に用意していつれひと目は逢べきとうれを力艸に我家へ歸れば番頭は出迎へ若旦那れ歸りかしかし先刻の地震には何處でれあひなされたと尋ねけるげに迷目からは地震で動た石塔も奇特と心得ちがふとはれかしき笑談ならずや兎角物にふれ事に渡りて意を放心と取るゝより眞黑に迷てさま〴〵の事が出來世の物わらひと成ぞかし故に萬につけて心の行衛を見失はぬやう放心とせぬやう恐れつゝしみ親主人も安堵し玉ひ喜び給ふやう事るを其放心を求ひる端ともいふべしこれ則ち

人の人たる道にて行末身の冥加もあしかるまし

孟子曰學問之道無他求其放心而已

いたづらに過す月日はれはけれど道をもとひるとき不すくなき

手島先生いろは歌に

常に主をば大事にれもや仕事するのも手がかるい

神道教訓

心の行衛二編上の巻 終

神道教訓

心の行衛二編下の巻

伊澤孝雄編輯

○徳とは人の身に受たる眞心の誠を明徳とも心徳ともいふ不孤とはうの徳を身に行へば其徳に感じて亦誠ある人出來りてわが心徳をたすけ追々徳にすゝむ人あるとのことなり譬へば廣野に一軒の家をたつると亦自然に其隣へ家の出來るものなり夫より追々ふへて一村とも成がごとしまた悪も同じく不孤黨を結びて張大にいたるもの恐るべき事なりいにしへ大聖舜帝の居給ふ所は一年にして成聚とてひとゝせの中に人多く集りすみて其徳をしたひける三年にして成都とてれい〳〵繁昌の地となり終に都と成しとかや是みな舜帝の徳の廣大なるしるしなり亦孔夫子も大聖の御徳にて御弟子がた三千人余も御徳をしたふて集りけりとかやうの中にも勝れたる御門人に顔子曾子倘子思孟子と追々に徳をつたへ給ひ今吾朝にも大徳の君子亦不少是全徳不孤のいさはしならずやむかし遼鄙に或者の妻

舅を深く憎て夫へなき讒言を言ならべ夫を惑はしければ夫も辨へなきものゝ妻の言葉を誠と思ひ父を山へ捨んと私に用意しけるを十三歳に成る男子父に向ひて思ひ止まり玉へかしとしば〳〵諫めけれども終に聞入ずして藁の手輿を造り老父を乗せ子を呼て汝も片棒かけよと言葉あらく詈ければ是非もなく〳〵父にしたがひ往ば父は山深く入てなさけなくも老父を捨けり子手輿を肩にかけて持歸るを見て父叱て曰く其輿いまは何かせん捨よといふ子のいはくやがて吾父年老たまはゝ亦もや此手輿に乗て捨参らすべしと云ければ父は惚身より汗を流し赤面して誤たり〳〵われ父をすてる吾子亦われを捨ん今汝が一言によつて積年の非を知りいざや老父を助け参らせよと輿にかき乗連歸り厚く孝養の志しを發しけるとかやこれらも子の心徳明かなりしもゝ徳不孤必隣ありて父を孝道に導きたり誰も皆かゝる惻隱の心は有ながら名利食色のために心徳をくらまし善事にはちからよはく悪きことには行あしつよく成もき心は怠り身は窮の

かたへ流れやすし譬へば衣類を調るにも紬を買んと思ひしが迚の事なら縮緬にと奢り繻子の帶と思ひしが迚の事なら錦と奢り櫛かうがいかんざしなどもとてものことなら張こんでと身分不相應にれごり亦は普請造作なども三四百圓　ぐらねで仕舞と思ひしも迚の事なら茶の間も建てと過分に奢り百目ぐらねで買積りの石燈籠も迚の事ならと金の拾両もはり込其外諸色何によらず迚の事ならと奢の方へ流るゝは善事に力のよはきしるし也人々希くば萬物の長たる人と生れしいさはしには親に事るも迚のとなら孝養に力をつくしたまへ主人に仕るも迚の事なら其身を致し忠勤をはげみ亦舅姑に事るも迚の事なら身をつみて孝心を盡し夫につかふるも迚の事ならかたく貞節を守り亦長に事るも迚の事なら其敬ひを厚くし朋友に交るも迚の事なら信實に交りたし亦親として子を育つるも迚のとなら人の人たる道をれしへたき事なり主人ならば手代小者を遣ふにも迚のことなら悪人にせぬやうれしへ導きたき事なり商家ならばとてもの

ことなら賣さきは主人のごとく買先は親のごとくありたし農人ならば迚の事なら田畑より五穀一粒なり共余分に實るやう丹精ありたし老若男女貴賤尊卑の隔てなく迚の事なら吾職分の勤に出精ありたき事ならずやかく心を用ひるは善事に力の强といふもの也され共日々事に應接するに及ては眼は見るに欲を生て力よはく耳は聞に欲を生て力よはく身は觸るに欲を生じて力弱く舌は味ひに欲を生じて力よはくなる是を五塵といふ五塵凝て悪張大にいたり不忠不孝も是より力よはくなる全く見聞事について心德の光を脱し失ふ也故に心を學び本心を發明する時は脱る事なし譬へば陶器の模樣は脱ず塗物の模樣は脱るせと物は燒附たもの也塗物は塗付し也燒付しは本心發明して德をつみしやうなもので生涯はげる事なし亦名聞にて譽られたいのあるひは利欲のために身体を作りぬつべりてつべりぬりつけてしばらくつとめて見てもやがて退凡しはげるなり亦一段下つては最初より德を脱してばかりゐる人もあり家

によつては主人も内義も息も娘も手代小者下女にいたる迄朝から晩まで脱しくらべ下女同志れさよどんれまへどれだけはがしたへ私は今朝かられ家さんにふくれつらして見せまして上はどはがしましした旦那さんもれはがしなされたかへ己は其方等のやうなところくさいはがしやうではないくつとはかいてある店の吉兵衛はどふじやへィわたしは此頃は間がなすきがな小宿這入いたしますもゑ體中大かたはげました長太郎われはどうじや私は今朝かられりんどのとけんくわしてはがし合てゐりましたがとう〳〵勝ました旦那ろれは出かしたれまきどのれまへはへわたしや此間宿へやすみに往て頭痛じやのはらいたじやのとて四五日すらし芝居のてらず見てもどりきつう脱にはかい行ましたしかしれ家さんはどうでざりますホ、、、わしらはれまへたちのしらぬ間に脱してしてあるわいなれかみさんもきのふから虫腹の疲つたやうにがみ〳〵と修羅もやし大分ははがしなされたれ年よりでさへ御精ができますいとなもちよて〳〵さらへ講で人なれてちく〳〵れはがしなされよはどまだらにとゝろはげました若旦那も此頃は毎晩〳〵夜中丑刻まで南とやら西とやらへれ通ひなされまけず劣らず脱してござる亦出入の久七どのはなしには北の河内屋様も此節はがし合が流行て掛屋舗も脱たさうな居宅や土蔵もはげかゝつてあるげなと實や世間に事ら脱し合がはやるとは悪には悪の隣ができ段々ふへて一面になる是皆心の行術を見うしなふもゑの事なり故に何ぶん道を學び心を明らかにして徳を積とときは心も易く身も脩り家もさかゑるものゞかし朱文公勸學之文曰勿謂今日不學而有來日勿謂今年不學而有來年日月逝矣歳不我延嗚呼老矣是誰之徳古歌に「あすまでと思ふ心の怠りにけふをわたにもくらすはかなき實や老さらぼいて毛のはげたる犬のごとくなりて死する人もあるべしかなしきの限りならずや恐れつゝしみて身に徳をつみたまへかし

何事もてゝろのうちの誠よりれもひたゝずばすゑは通らじ

子曰德不孤必有隣

仁とは人と言事なり其仁を形地にふみ行ふを道といふ道あるときは是則ち人なり道なき時は人にあらず道のあるとなきにて人と禽獸とのわかれと成る實につゝしまずばあるべからず「これやこの行も歸るもわかれても道によらねばならぬ世の中」貧富榮枯とも道によつてれこなへば心安樂にて身も無事なりされに何ぞや道によらずして富貴をねがひ貧賤をきろふは富貴を得ざるのみならずかへつて災をまねくこと眼前なり亦富貴貧賤とも各備ゐる定分ありて人力の及ばざるものなり此道理をよく心得たる人を天命を知る人ともいふ也昔唐土に或國王名高き知識の許に入せ王ひけるに師曰來ます道もよく候亦還らせ給ふ道もよくあるべくと申給ふ王此言ばかりを聞し召歸り給ひければ近臣いはく唯一言を聞し召てかへらせ給ふはいかなる御事にやと窺ひければ國王のたまはくむかし先祖の善行によつて吾今國王となりたれば是を來た道よしといふべし還る道よからんとは予政道に心を用ひ賢を擧不賢を遠ざく故に天命を保ちかへる道よからんと可云歟と被仰けるとかや

一人は性善が生れつきなれば來た道のあしかるべきはづはなき事なり故に大人はろの赤子の心をうしなはざるやう行ひ給ふにあらずや人々生れしときに一點の不善ある事なし去ながら善報惡報とてよきにもあしきにもいづれ報のあるものなれば勸てあしき事を思はず惡きとをせずあしき事をいはず慎しみあつき時はかならず歸る道よく有べき事うたがひなし亦世智がしこき凡夫は我慢增長し　五常五倫も打すてゝへらず口に善惡とも報はなきものなどゝ言ちらすは人中の虫なりとかや是をたとへていはゝ夏生して夏死る虫が世界はいうも暑きものと思ふなり愚といふもあまりあり善惡共に報がなければ世界はたゝぬ

ものなり或ひは秋冬かけて菜種や麥を時た報が來て油や醤油や麥製の物が出來四月に植た豆の報が秋に實り味噌と成て年中人の助となり春咲た梅やもゝや梨子や林檎の報が來て夏から秋に實るなり亦夏うゑた稻の報が來て秋に取り入億兆の人命をつなぎ養ふなりさすれば報で立た世界なら寸や亦嫁呼た報で子が出來子が生れた報で疱瘡や虫肝でなんぎ心配するゝの苦勞した報で息子娘が成長するゝの息子娘が成人した報で隱居する隱居した報で金持となる金持が奢た報で貧乏に成る息子が放蕩で金遣た報で乞食になる娘が身を徒に持たむくひで妓女に賣れる嫁が氣隨した報でいなされる手代や下男が不奉公した報で暇がでる丁雅が買ゞひしたむくひでいなされる下女の尻が重かつたむくひで半季ゞゝで主人が替る商人が物高ふうつた報ひで得意がはなれる職人が細工ろまつにした報で注文の仕事がへる百姓が放蕩ついたむくひで御年貢が不足する亦客嗇したむくひで子孫斷絶する陰德した報ひで子孫永續する息子や娘が孝行にした報で御褒美をいたゞく主人へ忠義にした報で仕附に氣をつけて下さる奇特に施行したむくひで災難をのがれるさて此報の出所は何所であろ考へ給ふべし天命といふことを知るとさつぱりわかる中庸に上天之載無聲無臭至矣目に見えぬ所から報がくる恐ろしい事じや古歌に「君とはゞ見ずば知らじとてたへまじ言の葉もなき天のはし立」兎角人は生死の一大事とて生れると死るが此上もない大事じやしかし生れたのは最早跡になりしもゝ是から先の死る事が至極の大事也其大事といふは死やうにも種々あつて前にいふごとく歸る道によしあしが出來るもゝなり

泥龜のやうに生ながら首れとさるゝもありいなごのかばやき見るや

うに竹やかねの申につらぬかれ死るもあり燒餅のやうに生ながら火にかけられひて〳〵して死るもあり世はさま〴〵の死やう是歸道のよしあしならずやかく恐しき死やうせし者は何になるであろふぞ何ぶん死やうのわるひのは無理した報じや人は道によらぬほどの不仕合な事はない道といふてさしてむつかしい事ではない易い近い事じや右にいふ歸道がよくしたくば平生心を安樂に持がよいうりや誰でも安樂に持たいけれど安樂に持れぬといふ人もあらん心が安樂に成たくば世間に無理は毛すぢほども通らぬといふとを眞から底から覺悟したらうれでさつはり安樂になるさて無理のならぬ譯は身を以て知るべしたとへば指は内へ曲が生れつきにて安樂なり外へ無理に曲るが生れつきでないもゑ痛む是則ち無理のならぬしるしなり心も其通りにて聊にても惡い事するか思ふか無理いふたりすると指を外へ曲ると同じ事にて心がいたむなり是性善が生れつきのしるしなりもゑに朝夕吾身に立歸り親に向ふて無理はなきか外へまげては居ぬか主人にむかふて無理はないか外へまげては居ぬか夫勇姑に向ふて外へまげては居ぬか無理をしい居ぬか兄弟姉妹の間または朋友の交りにも無理はなきかそとへ曲ては居ぬか亦世間の人よ金銀取引賣買のうへにても無理はなきか外へまげてい居ぬかと日々間がなすきがな吾身に省みるべしかく日々よ吾身に省みるときは中心潔白にして仰ひで天に不耻俯て人にはぢざる休の正意定まる是則ち心の安樂に成る秘密なりなを月を重ね年を積で修行すれば必ず仁義の良心慥になる左すれば孟子の所謂浩然の氣を養ふの一端ともならんかかゝる貴き道ある事を知らずして惡ふ心得ちがへると生れつきの安樂な心をくるしみのふちよしづむるなり誠や目にも見へず手にもとられぬ心がさま〴〵のことさしたり思はしたりいはしたりするい不思儀なものじやうかと心を取りはなすと何處へ行ふも知れぬよつて心の行衛を見失いぬやう無理なねがひ望みを發さぬやうするが其の道を以て事を行ふといふものなりゆるかせに思ひ誤り給ふ

べからず

孟子曰仁也者人也合而言之道也

無理いはずひりせぬ外はなかりけりかゝる人をば仁者ともいふ

爾き道とは天に行るゝ元亨利貞とて春夏秋冬の四季の德を人の身に受得て本心といふ本心の德は孝弟忠信の外なししかるを世の人道は生れ出て後に求むるものと思ひ亦事はつかふるといふて君父兄長に事るより家業体萬事のことも本心の誠を以て勤れば至て易きことなるを人欲身勝手のために難に求むるやうに心得給へる其源は迷ひを主とし本心の光を見失ふ所よりさまゝの分別し色々に私案し意の猿わしり巡り心の駒狂ひはせて其行衛を不知哀哉故に此本心の光り何國へ行しや何方に隱れ居るや工夫すべき事なり本心の光なきときは生涯主なしの身となるゆかし和論語に人の身の内に主人あるときは諸のやまひなし主人なきときは六根の眷屬思ひ〳〵に反逆を企てゝの大將よはき方より軍やぶれて身肉やすからざるものなり　万の事を辨へしるとも此さかひをしらざる人は人にあらずと誠なるかな本心の主なきときは人欲競ひ發て眼は色に執着してひはんし耳は聲に聞愛慕謀叛し鼻は芬〳〵たる香にむはんし舌は膏粱の味ひに謀叛し身は觸るになづみ謀叛し意は恣にせんとむはんして其全体を亡にいたる何ほど博學多才たりといへども是を征する事不能して性理にくらきは人にあらずとなりされば此主たる本心を如何して尋ね求べきと深く力をつくし厚く信心を發せざればもとむる事かたし故いかんとなれば年久しく人欲迷を主とせし事もゑ今更求るには其中間甚だ遠し

扨此本心のひかりを放心迷ひの爲につゝみ隱され常闇のごときを求いだし再び光を見んと身命をなげうちて力を盡しろの始に歸るを彼海士の謠の中玉取の文句により本心の光を玉にたとへて語るべし諺昔もさる例あり明珠を此沖にて龍宮

へ取れしとあり下略是はむかしより人欲に覆るゝ人も少からずまして況や今の世の人は氣隨身勝手のために本心の明珠は龍宮へ取るゝもことわり也此龍宮とはいかなる所ぞと工夫すべし則我づよき人の腹のうちなり今世に見る龍宮の書は唐造りの模樣にさしてかはる事なしろれに龍宮とわかるは形は人にありながら頭にあるひは鯛あるひは蛸ゑびさゝい鮑などさま〳〵の物を頭にいたゞき居るもゑ龍宮と推量するまでにて是繪ろら事のしるしなりながら是亦れしへの一端ともなりて思ひ中にあれば色はかにあらはるゝの理にて胸中の思ひが形地にあらはれ行狀に顯はるゝもの也兎角世の人も龍宮の書のごとく或は主人に不奉公し亦は骨れしみの奉公人は誰が見ても頭から不忠者と見もる也亦親に心配させ放蕩日々に彌增ば是もあたまから不孝者と見もるなり其外嫁も娘も髮のもひやうで大躰心がしれる猶櫛かうがいに五十両百両と高いのが手がらのやうに思ふもゑ頭に着好葉手すきと看板出して龍宮の書と異なることなし

すべて心のくらき人は迷ひに〳〵をかさねて天人一致なる事を知らずして迷故三界城とて五尺の躰を城として世界中をれれが〳〵と言歩行また其上に過去現世未來の三界に流轉して暗きよりくらきに迷ふは是全龍宮城にあらずや其迷の中へ明珠をれし込てれくもゑ聊の光もなく腹の中は常闇なり諸扨其珠の名は何と申けるぞ玉中に釋迦の像在す何方より拜み奉れども同じ面なるによつて面を向ふに不肖と書て面向不背の珠と申候下略茲によつて見ればこの珠はみな人々の受得し本心明德の光なり

凡夫は迷ひを主として眞黑に成り本心の光は人我身勝手の龍宮にれしこみあれども本體の明は未嘗有息者とてたとへば向ふの人に對して物いふ時も後に鐘太皷の音がすればちやつと鐘と知り太皷と知る亦横より誰ぞのと呼ばあいと答へる何かたよりよびさまく の昔がしてもいろ〳〵の物を見ても少しも見違へず聞違へず上下四隅八方とも明らかに事を辨じ毫厘も滯ふる事なし是則面を向ふに不背して面向不背の珠にあらずやかゝるふしぎの明珠を受ながら身勝手の爲に親主人の用事は何ひとつするも面倒懶の玉と炭團の如く眞黑になり亦乙姫のやうな美しい婦人をみれば前後を忘じ一向ひちうの玉ところび歩行何分ぐれついた安排なりされば其本体の明珠を求むるに諸ひとつの利劍を拔きもつてかの海底に飛入ば空はひとつの雲の波煙の波をしのぎつゝ海まん〳〵と分入て直下と見れども底もなく邊もしらぬ海底にろも神變はいざしらず取得ん事は不定也下界「雲の波煙の波を立へだてあひみん事は

かたくもある哉此のひとつの利劍とは人欲身贔負の念を切りはらふに譬ていふなり極重惡人なりとも人我身勝手の念をふり捨てゝ一心不亂になれ劍のごとくに諸の罪過をも切拂ふとあり右のごとく人我を切りはらはんと思へども年々仕こみし我慢の身勝手なれば妄念妄想雲のおとくむらだち煙のごとく起り立ては修行工夫はかゝつて見ても方角も分らず途方にくれし有さま也　譬　かくて龍宮に至り宮中を見れば三十丈の玉塔に彼玉を籠れき香華をそなへ守護神八龍並居たり其外惡魚鰐の口下略此三十丈の玉塔とは貪欲嗔恚愚痴の三毒迷闇のうちに籠置たり「三毒のその水上を尋れば唯身贔負のひとつ也けり香華を備へてとは泥龜鍋やき河豚黃鷄などの句ひならん花とい美しき遊女などの粧ひよ心を蕩すとならん是等は人欲の大好物ゆゑ亭主の好を客に振廻の理にていやがる本心に無理無体よこをつけるありさまなり八龍惡魚鰐の口な

心も是皆人欲の譬にて勿論鰐は何にならずむしやうに呑事が得手物もゑ茶や酒ばかりではなく家蔵株家督も呑ろうな手合也箇様のくらき所へ珠をれし迅し事も容易に取ろうな事ならず故に私智分別の我を捨もとより海士は丸裸取も直さず赤子の姿となり詰南無や志渡寺の観音薩埵の力を合せてたび給へと大悲の利剣を額にあて龍宮の中へ飛入ば左右へばつと分退たりける其障に寶珠を取て逃とすれば守護神追かく下略　扨此所に観音を願は我身なしに成たるしるし也

く時は即刻あらため亦人の善を聞ときは則ち其行ひに習ひまた人の悪を聞ときは忽我身に顧み吾にもかゝる類はなきやと其獨を慎しむべしかく聞たびに心の修行をする事なり猶性理の工夫に至つては萬の音を聞ごとあるひは我非を人よりき

に我往て聞にあらず彼處より來りて聞すにあらず此理如何と屢工夫の功を積て豁然と自得する事あるべしこれ全く心の外あらず夫に凡夫は何を聞でもうつかりひよんとして居るゆゑ歌に

鶏かすのかねこゑさへ聞なれて
永き寐ふりのさひる夜もあし
入合のかねとばかりに聞なして
身の夕ぐれを知る人ぞなき

勇氣の憤發なりやはかひと度吾が本心の光を見でや置くべき人の人たる道を不行して生涯やみ〳〵と終いるべきやと大ひに憤りを發し鐵壁をも破るべきいきはひにて人欲我慢の龍宮城へ飛入るなり此の勢ひよ辟易去て不仁不義不忠不孝身勝手

氣隨の惡龍ども左右へばつと逃散たり是全く邪は正に不勝の謂也其隙に寶珠を取て逃んとすれば守護神追かくとは工夫の功にてたゝ〳〵天より受得し明德の光に逢あらうれしやと思ふうちにはや以前の人欲我慢の惡龍ども追かけ來り取つき珠を奪かへさんと爭ふ茲が肝心の所也若すこしにても修行が怠れば「巡りあひて見しやろれともわかぬ間に雲がくれに」し夜半の月かなと名滿の人欲氣まゝの方が戀しく成て永劫龍宮住居にて、くるしみ死に終る也れろるべし〳〵 論兼てたくみし事なれば持たる劍を取直し乳の下をかきゝり珠をたしこみ劍を捨て伏たりける下略さて茲にれいて修行の極意にいたる也乳の下をかき切とは今まで腹のうちにて思ふ憎や可愛はしや悋やの妄念妄想の惡物を掴みいだし日々新に光明正大たる明德の球を安置せし也 論龍宮のならひに死人を忌ば邊にちかづく惡龍なし下略「れのが身を殺し盡せば何もなし生てくらせば是非の世の中兎角身勝手人欲の心を殺し盡せば心欲きろへども死人同前なれば

人我氣隨の惡龍ども相手なければ近附得ずれもひのまゝに明珠を取かへし主人公本心の光明赫赫たる時は六根の眷屬もみだりに反逆を企つる事「あたはず意の猿心の駒はしり狂ふのうれひなく中心無事清閑なり然る時は君臣父子夫婦長幼朋友のまじはりもしたしくなり修身齊家の基をひらき子孫も昌へ樂みの春秋をかさねんは目出度至極ならずや唯世の人のうれひ煩ふの根本は心の行衛を見失ふの過ちより種々の患難は來るもの也誠に道は固より身に受得てちかく腹のうちの事なるを遠く遙にもとめわぶるゞれかしき亦事はいとやすきものなるを難仕がたきやうに思ひ隔つるはかなしからずや兎にも角にも孝弟にもとづき誠を盡し其親をしたしく孝養を盡し其長を長として順ひ己が身を謙遜柔和正直に勸めなば是ぞ人の人たる道とはいふべし

孟子曰道有爾而求諸遠事在易而求諸難人人親其親長其長而天下平

ながきよのもめの中にもまちわびぬ
さむるならひのあかつきのろら
秋風にたなびく雲のたにまよりもれ出る月のかげのさやけき

神道教訓 心の行衛二編下の巻 終

神道教訓 心の行衛三編上の巻

伊澤孝雄編輯

都て人の心は直なるが生れつきなれど身勝手のために屈み邪んで終には身をほろぼし家を失ふなり此道理を指に譬て教へしなり無名の指とは俗にいふ薬もび亦紅さし指ともいふ此指は五本の中でも用の少き指にて屈んで伸ひでも大指や人さし指はどに不自由はないされども屈だなりでは人なみにない故見分が恥かしく明くれ心苦く思ふは人情なり若其指を療治して伸してくれる醫者あらば五十里七十里でも不厭わざ〳〵行て伸して貰ひやれ〳〵嬉しや是れでこそ人並の指に成たと悦ぶこと限りなし十本の指の中で一本屈でさへ是はど苦にやみて海山を越ても療治を受るにあらずや扨心は固よりひとつにて殊に一身の主宰且貴きの司なり人は一箇の小天地と稱し亦萬物の靈とも長とも貴んであるは心の正しい徳をいふた物しや今一本屈だ指でさへ恥しく思ふたが世間に心の屈だり邪だ人は

家並門なみ指はたとへ十本ながらかいんではじかみのやうに成たり首がかたげになりあるひは脊むし鳩むね趁跛などにて五體不具の人まゝあれども夫も忍に身を亡し家を失ひ子孫まで流浪さす事はないこゝろが邪と種々の災ひを招き身も家も失ひ子々孫々くまで艱難さすは不便の事なりさらば人も心が邪と夫につれて目も邪で主人親舅姑をみてもあのまあ強い顔で私を白眼でねやしやると己が邪だ目から主親も邪で見ぬる又耳も同じ事で親主人が身の爲になることを言るれば早邪できゝ亦しても〳〵私をがみ〳〵世話〳〵言しやるきくと思やや腹が立よろの事じやと尻に聞してねりや何ともない勝手にしやべれと大孔み目や耳が邪と主親を鼻であしらふやうになり口も相應に邪でふた言めには愛相すかし同じく身も邪んで己が身勝手の方へ引つけすり付ぎくしやくと見ぐるしい此ぎくしやくについてをかしい咄がある或所に出雲や龍藏竹林や虎藏といふ者ありしが齢も同年身体も同じ位才智も優劣なかりしが家業体の要用にて毎々同

席せしに龍藏心の邪し所より思ひけるは虎藏は我と同年其余も大体同事なれど人心の同からざると面の如しと何分愚な所がみへる迚も我には及ぬと心中に慢る氣味ある故出會の時會釋するにも何とやら横平なり故に虎藏思ひけるは龍藏我と年齢ろの餘も替りしてとなきもゑ失禮あるべきやうなし然るに此頃は兎角横平のあしらいころ奇怪なれ吾何ぞ彼等の下手に附べきや以後出會なば屹度返報してくれんと是も同じく邪んで待しに折節出會けふころはと虎藏龍藏に向ひ今日は貴殿も御苦勞と頭も下すさも長舌に言ければ是を聞と龍藏艶然と怒の色を顯しけれど餘人もゐれば無念を忍へ歸しが己虎藏重て此無念をはらすべしと心工みせしが其後の同席に龍藏先へ往て待居る所へ何心なく虎藏來り是は龍藏殿御早ふ御座りますと挨拶しければ龍藏は頭を下ることは扨れき首を立延しあい〳〵とばかり答へ嗚呼氣味よや先日の意趣ばらしせしと恰び居ける虎藏是を見てあら不怪や龍藏の不禮よし〳〵重て仕様うぞあらんと心を納め居し

が翌日出會の用事出來ければ虎藏先へ行待ねる所へ龍藏來り是は虎藏どの御苦勞と會釋しける時虎藏首を後へ反し胸を突出しあゝと答へける龍藏是を見て怪かへり扨も〳〵人非人め此含恨屹度見せ附くれんと俄然として我家へ歸り淑〳〵と思ひけるは今日虎藏後へ反返り無禮せし事也る此返報に終日終夜稽古しければ一念凝し所より反やう見事に成しかば大に娛び其時を待けるに過急の用事にて出會に付龍藏先へ行待所へ虎藏來り何氣なく御苦勞と言ければ龍藏茲ぞと後へ反けるが錬磨の功によつて甚以見事也虎藏急度思ひけるは吾先頃稽古して反しかど箇程迄には及ざりし是は容易稽古にあらず吾もひと思案すべしとて歸り種々工夫すれど所詮あの上は出來がたし奴何はせんと案じ煩ひねける此両人の有樣は長刀の鞘に柵棒を入るやうな物也長刀の鞘は身にたとへ柵棒は心に準ふ鞘の躰は反返り心は柵棒の樣にしやきばつてある俗にいふ反が合ぬといふは是なり然るに龍藏不圖思ひ付よし〳〵今度はいつろ寐て挨拶すべしと思案を究め居しがろの後の出會に虎藏先へ行待しに龍藏の來る蔭をみるとちやつと仰向に寐て未龍藏の挨拶せぬ先に是は龍藏大義〳〵と言ければ龍藏是を見きゝてあら苦々しあの寐ざま犬や猫ころねたなり挨拶もしやうが人としてかゝる事のあるべきや我彼に負まじとせば吾も彼がごとく畜生になるべし嗚呼恥かしや固は彼に負まじと思ひし一念の錯まり暫らく禽獸の群に入しころ口をしけれ今心底を改て人の人たる道に入べしとずつと通りて両手をつき頭を下げ是は虎藏どの今日は千萬御苦勞に存じ奉ると慇懃に述べ意に思ふやうは先去後へろる稽古せし時の苦しさにくらべては今前へ手をつき辭宜する安樂さこれなら始より虎藏ばかりに苦しましたらよかりしにと悔居けるを虎藏は寐ながら龍藏の禮義にかなひし姿言葉を見聞て忽頓悟し實錯たり〳〵吾心の行衛を見失ひ邪し我慢の意より龍藏ころ我に劣りて愚なりと思ひあやまりし妄念の爲に不禮非道に身心を抛ちしは愚と思ひし龍藏より吾身ころ遙に勝りて愚なりと

急に身を起し低頭平身赤面して曰吾足下へ對し種々の無禮今更謝るに言葉なし幾重にも誤るべしと只管詫れば龍藏も禮を返し左程詫らるに不及我も貴殿へ數々畢竟御互の事也と挨拶し両人始て笑顔に成しなり互に負まじと思ふ間は胸に邪みし一物ある故顔にひと癖ありしが笑顔に成しは意の邪が直つた證據ならずや是が人の本直なり堵厩先生のいろは歌に「意地が悪ふは生れはつかぬ直が固より生れつき。故に世の人指や手足の屈だり邪だよりも心の邪を正くするが身を脩め家を齊ふる最上の計なりと思ひ錯りたまふべからず

孟子曰今有無名之指屈而不信非疾痛害事他如有能信之者則不遠秦楚之路爲指之不若人也指不若人則知惡之心不若人則不知惡此之謂不知類也

「古釣のもがみも打ばなはるのになぜ直ぐぬか人のこゝろは道といふは人といふ事なり故如何となれば人は萬物に勝て義理をよく辨へ尊卑の分れを知り君を敬し臣を愛す茲を以て仁は人なり合して是を言ば道なりと既に孟子もの玉へり依て道といふは日々心に思ひ身に行ふ事より君父に事へ或は舅姑夫に仕へ親類朋友の交より家業体其外萬事に無理せず無理いはず何事も直に上を敬ひ下を憐み我分限をよく辨へ厚く慎み深く恐て忘ざるを道者といふ箇様に言と扨々ろれは六かしき事哉中々我等の勤る事ではないと思ふ人もあらんか夫が大間違ひじや天地の間に生ぜし生ける畜類鳥類より草木にいたる迄道を違て居るものはないよく〳〵目を附て見るべし羽ある物は空を飛鱗ある物は水を潜り柳は緑花は紅無理のないのが天地の常なり亦手違い事なし旅なぞして不案内の道に問人はなし大かた右であらふと往てみる十町計も行て道がない、あゝ仕ま ふた治良兵衛さん是は道がない跡へ戻らにやならぬ大きな損したわいな 治良兵衛もへんな顔して是非がない戻ましよ全体此やうな紛しい所には 道しるべの立石がありうふな物じやとぼやき〳〵戻る此道理でいかな人

も道のない所はいけぬ日本に畿内八道といふ道がある畿内といふ都の國をいふ八道は都へ通路する道なり東海道東山北陸山陰山陽西海南海北海の八ツなり天地に方角が有ゆゑ人にも五常五倫七情とて皆方角がある惡くすると此の方角を取違迷ふ本街道に迷ひ道はない在所道や山道より迷ひやすいその筈じや勝手に拵た道じやゆゑ勝手とは人欲身びいきの方へ引附るとなり先天に木火土金水の星有て行はる故よ春夏秋冬に四季の土用とを五行といふ是れが則ち天の道なり其の誠を人に受得て仁義禮智信の五常となる此五常を今日の上に用ひるを五倫といふ君臣父子夫婦兄弟朋友なり是れに事るに孝弟忠信の本道を脇目もふらずに行ふを道を知る人といふ前よいふ七情は喜怒哀懼愛惡欲なり是れを譬ば道中の名所舊跡のやうな物なり味て見物すると面白い味ふとい眼よ善を見て進んとを味ひ惡を見ては除んとを味ふ耳鼻舌身意も是に準ふ七情を味ふとは喜は悅ぶと也喜も御代泰平の御仁惠を味ひ喜び父母の長命を味ひ喜び且は吾身の無事を味ひ喜ぶ也亦怒にも吾身の行ひの屆ざるを怒り憤り且また人欲を遠ざくるに力の足ざるを味ひて怒憤るべし哀懼愛惡欲も是に準ふべし茲に反して名所に泥み癖する時は心の行衛を見失ひ何國へ往やら十方もない所へ迷ひ込恐しい事じや夫故道は須臾も離べからずと敎てある右に譬し七情の名所舊跡を見ぬさき聞ぬ先恐れ慎むのを道に離ぬといふものも此心得なくて放心とすると　七情に僞される茲へろの僞される釋を喩を以て云べし彼劇場の忠臣藏の狂言に與一兵衛は聟の爲に娘を賣其金を持歸る夜道に定九郎右の金を奪んとて殘忍たらしう殺す與一兵衛の苦痛する怛しさ見るに忍びず座中殘ず齒怒してあの定九郎の人面獸心と惡ま ぬ人はなし其定九郎が與一兵衛を殺たのは金もゑじや若與一兵衛が金を持て居ずば命に氣遣ひいない扨此金は何にする爲に殺て取た定九郎が意を推慮して見ると大方酒が呑たい膏粱が喰たい媚婦が買たい蕩子〳〵遊たい博奕が打たい先此計の直打と見ゐる一座の見物人見て居る中は與

一兵衛は不便や定九郎にくやと思ふより外はない有難いもので是が則本街道で人の人たる道也扨此場が濟で幕になると座中の見物人が辨當をひらくやら酒を呑やら話をするやら種々無量と成る場に居る若い衆が機敷を見てこれ六兵衛も治郎兵衛も見やれ三四と擴機敷に居る客はむさい事して居るあの美しい婦子の膝にもたれかゝり酒呑でゐるいま〳〵しい野郎めといへば六兵衛がいや〳〵夫より向ふに居る女惱に後家とみへる大体年は三十ぐらゐのあの首筋の白き横顔の美しさどふもいへぬあの顔附ではどふやら相手はしろふな安排あんな後家をせしめ漆にしたらよかろふ亦後の方に居る若鯊な男はろこらあたりを見廻しゑらい膏粱ろふな辨當玉子やら生貝やら鯛の作り身鱧のでんがく何も彼も膏粱ろふなあんな辨當喰てころ面しろけれ我等は母者人がしてくれた此辨當燒どうふに干鱈三角のにぎり飯是が人中へ出される物か全体此方の母者は昔者殊に田舍出もゑこんな事しくさるとばい〳〵いふてゐる左の方に十七八な娘が

二三人もうしれみつさま五の筋のさじきにい黒い着服きて居る男なんとよい男じやないか年は廿二三であろあんな男持だ女は仕合者じやと咄て居る隣にゐる男が申姉さんひとつあがりなさちぬかと盃をさすも盗人の晝ねであてがあるとみへる亦供に來る丁稚は延上り〳〵人の物喰ふの斗みてゐる下女はよろの女子の髪に見とれてゐる扨よふ合點するがよい其不睹所を恐れ慎とは茲の事じや今までは人面獸心の極重悪人と思ひし定九郎と兄弟分になつて膏粱物が喰たい酒が呑たい色事がしたいと種々の望を工み意は九で定九郎女中も半分は定九郎の女房にもなつて居ろふなかうみると我身が定九郎やら定九郎が吾やら分らぬ狂言見てゐる中はあの定九郎め幕になると定九郎さま大好〳〵と定九郎の通りにしとなる此樣に意の替は前にいふ　七情の名所舊跡に泥みて放心〳〵すると本道を放れ心の行衛を見失ひ道なき所へ踏こみうろ〳〵まで〳〵してゐるを世間の人が見て彼者は人面獸心極重悪人と定九郎と同じ直打にしられて

世の廢れ者となる是に附てれかしい咄がある或者二人連にて住よし參りせしが道にて酒をのみ大に醉しが一人は一向足たゝず大道へ倒れて正体なし色〳〵と賺ても死人同前なれば是非なく引かたげて戻り門口から是母者人こゝの醸次郎は大醉にて足も腰もたゝぬゆゑ吾がかたげて戻つたさあ受取て下されと上り口へれろしければ母親も飽倦果て又しても〳〵酒が過て困りますといひつゝみれば着物と帶ばかりゆゑ悔りして申し吉兵衛さま是は着ものばかりで體がないといへば吉兵衛見てほんにめんよふ輕いと思ふたゆゑ〳〵本眞の體取てこふとはしり行暫くするとすう〳〵いふて戻りさあ〳〵本眞の醸二郎持て戻た偖に渡しましたゆゑ母親これは〳〵大きな御苦勞何處にゐましたな吉兵衛されば戻つた道を尋て往たら長町のはづれに落て有たしかしよう人が拾はなんだ此やうに人も拾はぬ廢れ者の定九郎同前になつては譬へ勘平の鐵砲は遁れても天是を不赦果は刀の錆か或は路傍に餓するなり是皆道に背て無理した報ひなり又無理

は世間へ通らぬ證據は魚の小骨亦飯の中の小石不計口へ交りてみ齒に障るを儘よ呑こんで仕まふとぐつと やる人はない舌で追廻し出すなり骨や石は無理もゑ通らぬ是で無理の通らぬ事を會得するがよい道歌に「無理いはずむりせぬ外はなかりけりかゝる人をば仁者ともいふ此うたの通りにて朝起るからねるまで心に無理を思はず口に無理をいはず身に無理せず萬直に孝弟に志し厚してろのいまだ見ぬ所其いまだ聞ぬ所を戒めつゝしみ恐るゝ人を誠の道者といふ信ずべし〳〵

道也者不可須臾離也可離非道也是故君子戒愼乎其所不
覩恐懼乎其所不聞

莫見乎隱とは人に隱てする事は悉く見はれるといふ事也世に隱惡とて人の見ぬ所しらぬ所で惡事する雖れも見てゐぬゆゑ知れぬとれもふは誠に愚なる至極なり世の人の知りたる事ながら昔東漢の世に揚震といふ人荆州といふ所の守護たりし時吾友の王密といふ者を君へ進め擧て昌邑

といふ所の奉行と成しけり其後揚震東萊の大守と立身し入部の時昌邑の縣を通りけり其旅館へ夜陰に王密金十斤を持參して揚震に送る是は前に吾を君へすゝめて奉行となりし恩に報ふ志なり然るに揚震王密に向ひて言けるは先達て君へ進しは貴殿賢才ある故なり如何ぞ其禮として此金を受べきや左樣の賄賂がましき儀慥てあしき事なりと答へければ王密重ねて言けるは殊に夜中なり外に知る人もなしひらに納玉へと進めければ揚震曰何ぞ知る者なからんや忽天知り神知り吾しり貴殿知るにあらずやと申しければ王密大に赤面して歸りける是を揚震の四知とて廣く世にいひ傳り此四知の中で天知る神しるといふが肝心の所なり天は目に見ねども入滿ざる所なく家の中より床の下物入の中人の腹の中體中の毛穴まで通ざる所はない天を放れて悪事は出來ぬ是は天を離ると忽死るろの筈じや人の息は天を呑たり吐たりして生てゐるさすれば息を止て悪事が出來るか考て見るべし善悪とも天の知らざるとなしまた神しるとは前に記す

隠す事人はしらねど千早振神のみる目をいかゝよくべき此歌の通でとても隠さるゝものでなし予も幼少の時悪作した事を今の年に至り思ひ出してみるにあり〳〵と覺えてゐる誰でも此通りで若い時隣の下女の尻たゝいた事丁稚のとき小遣ひ錢はつして買喰した事帳合をまごつかして遊所の拂した事諸人へ預られ食客でゐた時内義にくしや〳〵せり〳〵言れた事亦女中も向ひの吉さんと芝居戻りに泊て戻つたと下女い給銀大かた店や物にはり込で仕まふたと今祖父祖母と言れるやうに成ても少しも忘はせぬあり〳〵と覺て實に明らかな物じや是が

本心の德じや亦萬の事隱すはゞ心苦い物はない聊な事でも隱し課る事はならぬもの也是について咄がある或所に無筆の男ありしがろの無筆を隱してよめるやうな顏してゐる或ときに子に炙すへんといふ所へ近所の人來り是はよい事が出來ますしかし炙するゐなさるなら鳥度日を見てからするゐてあげなされ亭主なるはゞゝ女房に暦を出せといへば暦は此間隣へ借ました最十日にもなるに戻さぬゞれ取て來ましよと裏から出て早速に取て歸りければ女房は夫の無筆を氣の毒に思ひ顏を詠めてまゞ〳〵してゐる亭主は客〳〵の負をしみでろの暦早ふれこせと引とりよめる顏してゞれ〳〵と暦をひらきみる客傍から七兵衛さま夫は逆さまでござりますといへば七兵衛いやさ暦を隣へかすとめんよふ逆さまにしてもどす悪い癖じやと是で合點するがよいとても隱されぬ無筆ならはじめからあらはしてゐると此やうな二重の耻はかゝぬ隱しだてして耻を重ねるとは愚ならず世の人のかくす事は天の睹には電のごとしとかや愼しむべき事ならず

やゝ扨此次が殊に大事の所じや

莫見乎隱

「隱すと人はしらねゞ千早ふる神のみる目をいかゝよくべき

神道教訓

心の行衛三編上の卷

神道教訓

心の行衛三編中の巻

伊澤孝雄編輯

微なるより顕かなるはなしもゑに君子は慎其獨とは是も同じ道理で少しの事でもしれずには仕廻ぬ何れあきらかに知るといふ事なり心に思ふていまだ言葉に出さぬ事もはや天地の間にあらはれきつてある昔の子守歌にうたを唄へは心がしれる聲と節とで猶しれる奇妙なものじや古へ唐土に或人琴を彈じねけるに庭の松が枝に蟬のねるを下から螳螂が彼蟬を取んとするを見てあら不便や今に蟬は螳螂の爲に命を失ふと思ひねる所へ朋友此家へ訪ふとて門口へ來りしが琴の音を聞てふしぎやあの琴の音に物の命を取殺す譬ありと猶豫立しがやがて琴の音も止ければ内に入て案内を乞ざしきへ通り時候の挨拶すみて客主人に問て曰今貴君の門前へ來しり所琴の音聞ねしろの中に殺伐の音色ありしは如何なる事の侍りしやと尋ねければ主人手を打て奇なる哉妙なる哉思ひ中にあれば必ず聲色に

顕るゝと我琴を彈居しに蟬螳螂の爲に既に命を取るゝを見てあら不便やと思ひしが忽琴の音に顕れしなりと言けるとかや是等は微な蟬でさへかくのごとし天地の理は微妙なれど一毫の隱るゝなし今ひとつ奇妙な話があるひかし大聖孔子御在世の時子路といへる人聖人孔子の弟子となりけるが未聖人の御德を知らざりける或とき孔子に從ふて山に行しが子路を召て汝谷へ行て水をくみ來るべしと仰給ふ子路畏奉と出行しが途中にて虎に出會ける固より其性剛勇なれば忽挑て打殺しろの尾を取しが左あらぬ躰にて孔子に見て問ていはく上士の虎をとるは如何孔子の玉はく上士の虎をとるは其髭を取子路曰しからば中士は如何の玉はく其首をとる又問ふ下士はいかんの玉はく其尾を取と告たまふ子路快からず心中に恥しが猶も不曉腹あしく思ひかはぢに知りたまふうへは若吾に害心あるをも知りたまふやと石を懐にかくし持重ねて問て曰上士の人を殺は如何の玉はく言葉を以てすしからば中士は如何の玉はく既に刃を以てす又問下士

は如何のたまはく大概石を以すと仰られければ子路忽面色變して懲怖し眞に聖人の明哲を感伏し夫より無二の志を立て事へけるとかや前にいふ如く琴の音に殺伐の兆を顯し亦意に思ふて未言葉に發せざるを聖人かならずしりたまふなどは眞に微なるより顯なるにあらずや此道理で蕊に僞ある者人に向ふてろの僞をいふ時は瞳子定かならざるもの也例みるべし或は手代が主人の用事をかこつけて出て吾が勝手の所へ行遊び過して戻たときや亦下女が袋父入の日限より四五日も遊び過して戻ると主人が何もゑ遲かりしと尋ねらるればよいかげんにぬらくらと僞いふとき必俯て瞳がろれる也亦正直な事いふときは向ふの人と瞳と吾瞳と合もの也是等は日々の事もゑ例てみると僞いふ人は直にしれる誠に微な腹の中の事が目へ顯るゝ顯なものじや扨僞に附てれかしい咄がある或寺の和尚法に背にて折々魚肉を喰けるを講中見附て和尚に向ひ昨日れ寺へ參りましたら庫裏の庭の隅に肴の骨がでざりましたあのやうなとでは旦中の氣が惡ふ

なります憚りながら御嗜みなされませとまじめになつていへば和尚赤面しながら滅相な事言しやる此方昨日は精進じやあつた實に微な事が世間へばつと知れる此しれるに附て惜な證據がある彼鉢の木の謠の趣向に北條相摸守平の時頼相州山内最明寺にて落飾したまひ覺了房道崇と改め二階堂大道唯一人召具して諸國修行に出られしが上野國佐野に來りて大雪に逢ひ佐野源左衛門が家に一夜の宿りをもとめたまひしが主人の人拇尋常ならず見ければ論いかに申候主の御名字をば何と申候ゑ承りたく候いや某は名字もなき者にて候何と仰られ候とも唯人とは見ねたまはず候自然の時のためにて候何の苦しふ候べき御名字を承り候べし此うへは何をか包候べき是ころは佐野源左衛門常世がなれるはてにて候夫は何とかやうの散々の躰には御なり候ゑ其事にて候一族どもに横領せられかやうの身となりて候なふろれは何とて鎌くらへ御上りあつてろの御沙汰は候はぬゑ運の盡る所は最明寺どのさへ修行に御出候うへは候かやうに零

落候へとも御覽候へ是に武具一領長刀ひと枝またあれに馬をも一疋持て候是は只だ今にてもあれ鎌くらに御大事あらば斷離たりとも此具足取てなげかけ銷たりとも長刀を持疲たりともあの馬にのり一番に馳參じ着到につき偖合戰はじまらば敵大勢ありとても一番に破て入りれもふ敵とより合ふて死ん此身の此まゝならばいたづらに飢て死ん命なんぼう無念の事ろふぞ。此文句でみると源左衛門は誠實の人から也扨微なるより顯なるはなしとは茲の事じや最明寺どのも宿りし家が佐野の宅とは夢にもしらぬ源左衛門も此樣に物がたりする出家が最明寺どのとは夢にもしらぬこれは源左衛門が平生思ふてゐる事を話たのじや誠に今までは誰にも言ぬ微な事也實は源左衛門は最明寺どのに言たふて〳〵ならぬけれど廣い日本國中何國に居たまふやら雲掴やうなものじや夫に最明寺どのは源左衛門と鼻つき合してござる奇妙なもので是が則ち顯な證據じや善事ばかりじやない惡い事も此通りじや天地の妙用天命の定數いやと言れぬ夫よ

り最明寺どのは國々廻りて鎌くらへ歸りたまひ諸國にて見聞し善惡邪正の沙汰せんと大名小名を呼登されし其時まづ一番に源左衛門が來りしや否や尋ねたまふに疾來れるよし申しければ早速源左衛門をよび出したまふ諭其中に横縫の離斷たる腹まきにさび長刀やう〳〵に横たへ惡びれたる氣色もなく參りて御前に畏るやういかにあれなるは佐野源左衛門常世か是これは日外の大雪に宿かりし修行者よ見忘れてあるかいで佐野にて申せしよな今にてもあれ鎌倉に御大事あらば斷離たりともあの馬に乘一ばんに馳參るべき言葉の末を違へずして參りたるころ神妙なれ先々今度の勢づかひ全く餘の義にあらず常世か言葉の末誠か僞かしらんためも也まづ〳〵沙汰の始には常世が本領佐野庄三十餘郷歸し與る所なり亦何よりも切なりしは大雪降て寒かりしに秘藏せし鉢の木を切火にあてし志しをば何の世にかは忘るべき其恩賞に加賀に梅田越中に櫻井上野に松枝合て三ケの庄子々孫々にいたる迄相違あらざる自筆の狀安堵に取ろへ賜けれ

ば常世は是を賜りて三度頂戴いたしけり是全く天命の定數にて源左衛門の誠忠があらはれた妙な物じや扨是に世間並の理屈を附ていふと源左衛門は幼少の時一族佐野藤太常俊に所領を横領せられ零落し身なれば鎌くらより米一粒も貰せぬさすれば鎌倉に大事が起ろが小事が出來ふが搆ふ事はないとれもふは凡夫了簡なり是では本を忘るゝといふもの也源左衛門が父佐野三郎政常まで數代鎌くらの恩遇にて我身もろの中より出生し人となりたる事なれば鎌くらの恩はいふもさら也今も不心得なる者は吾は九才の年より奉公して両親の世話には格別なりはせぬ亦主人より僅な本手を貰ふたばかりじやなどゝへらず口たゝく小人も儘あり產れれつるより両便の介抱から許多の大恩また主人も生涯喰るやうに家業を教玉ひし大恩主親の大恩は海山より廣大な疎に思ふべからず扨世俗の諺に一粒萬倍といふごとくで源左衛門は最明寺どのとはしらず只の修行者とれもひ鉢の木を切て馳走せしは譬ば一粒を蒔しがごとし夫に三ケの庄を貰し

は萬倍になりしといふもの也忠孝も元手入ずに身の行ひや言葉やさしふ言のは一粒をまくがごとしろの積善の餘慶にて子々孫々まで繁昌するは萬倍にして取がごとし夫ならとて萬倍をあてにしてする忠孝は役にたゝぬ右源左衛門の通でなければ萬倍にはならぬさて此鉢の木の話や謠の文句ばかりでゝは利益がうすい是を我身に引あてゝみると彼源左衛門が鎌くらを大切にする譯がしれるさらば身の中で大切ない所は何處じやさし詰頭であらふ頭は體での主人もろじつとして居て手足の家來を遣ふてゐる或は月代をするにも手が湯を汲で來て揉で毛受を持くゐる頭が痛と目が御氣のどくなどしかめてゐる月代仕まふと手がよふれ剃なされましたと撫廻すもろに頭を鎌くらに喩へ手足を源左衛門にたとへてみると或は長い木や竹が立てある自然風が吹てあたまへ倒かゝると頭の鎌倉に御大事が出來た所へ手足の源左衛門が馳つけあなたは御除なされて私にれまかせと何程手足が疵を蒙るまでも働き止るいかに不忠な手足じやとて頭

へ物が倒かゝるをあゝ儘よと餘所にみては居ぬ是で合點するがよい主親の爲には命に替て勤はたらくが人の道なり亦心は一身の主人也る心を鎌倉にして見ると體中が源左衛門なり自然空腹なつて心が苦み躰の源左衛門が一致になり水を汲やら米を洗ふやら足は豆腐を買に行やら口は釜の下吹附るやら早々飯を焚て心のかまくらへ忠を盡す此道理をよく〳〵辨へ唯忠孝を勵給ふべし大事は隠しても直に顯はれる亦善事は聊でもきゝはせぬ顯に知れるもゑに兎角心の行衛を見失ぬやうあつく慎み尤見ぬ前きがぬまへに戒め恐るゝ人は吾身一生はいふに及ばず子孫までも無事に昌ゆるものなり朝夕に心を用ひたまふべし

道歌「心をばいかなるものとれもゝしに目にもみられずてん地いつぱい
　　莫顯乎微故君子慎其獨也

古歌「いつはりのなき世なりせはいかばかり人のこゝろのうれしからまし

聖人の仰に婦人や道理にくらき凡夫などは敬のとゝき兼るものなり近づけ親しくすれば馴驕へる亦遠ざけ緊密すれば怨てよらずいつれ淳粹ならぬは凡夫や婦人の常とみゐる恥かしき事ならずや取わけ女子は外を奇麗に磨き嗜む事には意を惱しどうしたら美くしふ見ゐるであらふと夜晝髮と顔と首すぢをなぶりものにしてゐるもありなる程意を盡せばつゝす程美しふなり愛きやうつかし言葉も用意ありげに物すれば何處のれ家彼所の娘と人も見かへるくらゐじやんさらばろのれ家や娘の腹の中もさぞ奇麗にあらふとにもへば左にはあらで人並にずぐれて穢ないのもあるろふな

其うへ慢氣がつよい其證據は女子同士行合と互にしり目で器量から衣裳頭から足までひと目に白眼つける恐しい我慢な根性じやろの我慢に附てれかしいはなしがある或れ家が下女を供につれて出られしが元よりれ家も下女も大の艶色にて茲をはれと行るゝをある米屋から米ふみの男がやれめつろふ美しいと譽けるを聞ぬふりして行すぎれ家下女に今のは何といふたのじやと問れければ下女は澄した顔でいゝゑあなたの事じやでざりませぬと兎かく己惚は女子の常とみへる十人並に勝て器量がよいと必鼻にかけてたちまち天狗となる婦人の我慢は見にくいものなり昔の小野の小町でさへ我慢も乞食になりしとかや卒都婆小町のうたひに實にいにしへは憍慢尤甚だしう翡翠の笄は嫋娜と嬋娟にして楊柳の春の風になびくがごとし亦鶯舌の囀りは露を含める糸萩のかごとばかりに散ろむる花よりも猶珍らしやいまは民間賤の女にさへきたなまれ諸人に恥をさらし嬉しからぬ月日身につもりて百年の姥となりて候此翡翠とは玉の名なり嫋娜とはよわゝとしたる物でし楊柳はやなぎ也春風に柳のなびくやうに美し鶯舌はものいひの可愛らしい事也かゝる美人の小町でさへ年老ては見ぐるしまして況んや通例十人なみ二十人なみ或は五十人並などの少し出來のわるいのは猶さらの事ならんある所に相應の分限者の娘勝れて三平二滿で醜かりしが二九の春を迎へても似合しき縁なかりければ親類はいふに及ばず知音の人にまで頼みけるが此家へ出入する醫者媒介を渡世のやうにいたしけるをさゝ早速主人も内室もくれ〳〵頼れける醫者も禮金を貰んと思ひ種々に聞つくろひ言入けれど先方から聞合すと肝心の娘の器量が悪ひとの事も乞相談出來ず或とき見世の支配人醫者に向ひ先達てより主人も愛玉の事を段々御頼申し上ます通り何卒急々縁談調ひますやうくれ〳〵御頼申ますとせり込で頼みければ醫者天窓をかき〳〵私に如才はござりませねどれ急ぎならまあ餘人にれ

見せ下されませと願りけるとかやかやうな賣にくい娘でも心器量が大極上じやとつい相談が出來る亦何はど媚がようても意に嫉妬のあるのは恐しい先年大阪ふしみ堀邊に夫婦さし向ひぐらしの人ありしにろの内義至つて嫉妬深かりしが不圖煩ひ附てより夫をろばに引附置て鳥渡とも外へ出さず其上わしが死んでも必ず〳〵後妻を入たまふな若後妻を持たまふならば急度うらひべしといふ口より炎のごとき息を吐さも苦しげに見るゆゑ夫も見かねて胸なで下てやらんと手をさし入るれば其あつき事火のごとく中〳〵手をさへるとならず實や因果執着の念ゆゑ生ながら焦熱大焦熱の地獄に墮落し苦患を受るを目のあたりみるゞ恐しまた顔色の尖き事たとへんかたなし夫も是に飽倦はてゝ妻に向ひ疑ふは無理ならねどかならず安心するがよい神かけて後妻は入ぬといひけれど亦しても〳〵後妻の事を言くらしけるが病障なくせまり今計の際になりて目を見はり夫を白眼何かいひたげに口を開きしがろの口何となくれそ長くなりて

死しけるに夫もそを不便にれもひ白帷子打ち覆ひ葬式の營みせんと近隣の人を頼みけり元より此の内義かはどに嫉妬ぶかき性質ゆゑ近隣の人にも疎まれ居けるゆゑ早速訪人もなかりしが其の中にい常こそあれかゝる折にはど両三人きたりてさらば沐浴いたさ參らせんと帷子を取り除みればこはいかに人とゝみゆず鬼女のさまゆゑ恟り仰天し足もそらに逃かへり戰つき病ふしける此の事近邊へ聞ければ誰れ問ふ人もなし尤も寺へ早朝に野送りの事案内せしてとなれば夕暮頃伴僧來り死去の悔みいひて寐させわる死人を見て沐浴は濟まさたが何故棺に納めその用意を仕玉はぬぞと云ければ亭主泊ぐみて語けるい愚妻は平生嫉妬ふかき性質にて聊面色變じ候ゆゑ誰も沐浴いたしくれ申ず夫につき米來の程も心もとなくぞんじ候何卒宜しく御回向なし下されかしと泊とゝもよ頼みければ夫じや迚と言つゝ伴僧帷子をまくりひと目見て是も同じく恟りし不怪變相殊

に沐浴もせぬ死人の葬式は出來ませぬと云すて〻逃歸りける亭主も是非なくろの夜を明し翌日になりて何分捨置事もならず方々頼みけるが或人是をき〻て左樣の亡者を沐浴するは至て功德になると両三人云合せ出來り沐浴にかゞり後よりれこせば骨剛ばりしもゑすつくと立ける恐しさ身の毛も彌立てゞつとせしかど心をさだめ壓倒し三人して骨を折にろの堅き事木のごとくにて尋常の骨の堅きとは雲泥の違にて容易折ず兎角してやう〳〵座ら也しが眼を見はり居るもゑいかに撫れろしても閉がず髪も逆立刺刀にてはろれず剪刀にて切卒ふじて棺に納め野送りしけるが不思議や翌日より亭主病つき晝夜とも譫言にろの樣に手をとるな亦袖を引か行わいのう〳〵といひつ〻二七日目に死しける實や愚智より變せし嫉妬の妄念　の爲に夫婦とも苦しみを受る因果ゞ恐し心の行衛を見うしなふといか樣の苦艱も手細工にてしらへる恐るべき事ならず此樣にいふと世間の女中はみな惡いやうに聞ゆる中々ろふではない亦よいのも隨分ある先年京都室町邊の商人に勝て媚貌艶しき一人娘ありしが幼少より心ばへやさしく物靜にてとゝば少く慎しみ厚く取分両親への事へ甚だ神妙なり諸藝を敎ゆるに一度聞ては忘るゝことなく殊に織ぬひ績紡の業にくわしく料理養蜆までも功者にてろの余琴生花茶香なども心がけよく亦或やごとなき御方より御題を戴き和歌の道にも志し厚く誠に何ひとつ云分なし此娘に羨子聟を貰んと種々聞繕ひける世間からもあの娘の聟になる人は仕合者じや身体はよし娘の器量は十二ぶん諸藝はありろの上れとおしく大極上出來じやと噂しける娘もはや二八の春も後にみる折節或大店の手代に至極實躰なる人拇ありて羨子究りしかは家内の者は勿論近邊よりもごのやうな聟でわらふと噂しけるうち其日にもなりければ媒介同道して來り婚禮も首尾滞りなく調ひける扨此聟は人並にすぐれて眉低く禿頭の黒菊石獅〻舞ばなの鰐口取わけ頭と尻はすぐれて大きく誠に取ごろなき不恰好まだ其上算筆の外は何も知らぬ不器用人なり其

はゞじや近江の田舍から奉公に出た人なりされども娘は両親次第もゐ何ともいはず至極むつまじく暮しねけるが或とき雨濕やかに降ける日出入の老女いひけるは此頃は琴や香花などのれ慰みもすきとなされぬやうぞんじますかやうの日ころ御鬱散にちとなされませと進めければ娘しとやかにいらへけるは今の旦那さまは田舍より御出ましなされたもゐ家業の外なくさみ事にれ携りなされませぬ夫にたとへ氣ばらしにもせよさやうの慰みいたしまして自然御氣に障りて御きげんがうんじましたら取返しもなりませぬわたしの慰みかられとゝさまたかゝさまにまで御心配をかけますやうになりてはと兼てぞんじますもゐ是までいたせし慰み事はふつゝ止ましたと語りければ老女大きに感心いたしぬ誠に柔順恭謹の婦徳をよく心得形に踏み身に行ひける事類ひ稀なる婦人と其頃世擧つて稱譽けるとかや希くば世の婦人是等の行狀を規矩としたまへかし

子曰唯女子與小人爲難養也近之則不孫也遠之則怨

金玉錄「こゝろこゝろ世をはすてしかまはろしの姿も人にわすられにけり

夫之所貴者和也婦之所貴者柔也

古今「風ふければれきつしら涙たつた山夜半にや君がひとりてゐらん

神道教訓

心の行衛三編中の巻 終

神道教訓

心の行衛三編下の巻

伊澤孝雄編輯

聖人酒の事を緩やかに仰らるは酒は人によりて多少あれば何ほどゝいふ限りはなし唯亂れざるは肝要なり世間並では酒呑でも酔ねばれもしろないといふ一通りは聞ねたやうなれど酔にも段々ありて用事の出來るほどは、赦も可なれど大酩酊に成ては何も出來ぬ是等は俗にいふ酒に呑れるといふものなり始は人酒をのみ中ほどは酒さけをのみ後には酒人を呑也ある所に娘三人持しが元來酒すきで終に三人の娘をのこらず呑で仕まひし也酒が可愛娘を呑とは恐しい事ヒや餘所の事ではない予も酒癖がありて折々後悔せし事ありつゝしむべき事なり故に禹は惡旨酒とあるも全く酒が家國を呑事を惡みたまひし也

又なくて叶はぬ事あり或は神にさゝげ貴人に呈し亦少し呑ば老を養ひ氣

實酒はわるい物の天上じやけれど

血を廻らしろの余功能莫大なれば必惡むべきにもあらねど前にいふごとく酒に呑れてはたまらぬ好飲酒不顧父母之養やうになつてはかならず斷まねばならぬ世の人ごとに酒を强て足も腰もたゝぬやうになるを悦ぶは禮義にもろむき聖賢の戒にも違へりされど今は客も馴が來て强てくれぬとゆふべは何とやら拍子がなかつた御納盃になされといふたら直さま盃を引たあんまり正直過て一二盃たらぬやうに思ふた今朝はきよろりくわんじやなどゝ矢張つゝうがしたり胸がむか〳〵するくるしい二日酔がしたいとみへる去る人酒に大酩酊して歸りに水道へはまり泥まぶれに成てもしらずにねてゐる往來の人の足に雪踏がさはつたもゑみれば新しい雪踏尤かたし也是は不思儀とみれば水道に人の寢息が聞ゆる惘りして提灯にてすかしみれば吾近處の人なり扨も〳〵不怪事と六兵衛どの〳〵と引起せば何やらぐだ〳〵いふてわからず是六兵衛どの酒を呑ともよひかげんに呑だがよいといへば六兵衛舌にてさあこれが丁どよいかげんじや

と言しが醉が覺たら定めてわるいかげんじやあろ恥かしからずや其よいかげんがわからぬも忘れぬやう呑べしとの敎なり或狂歌に「祝をも愁をもまた喧嘩をもませかへすのは酒でころあれ又道話に「少しづゝ銚子盃かたむけて終にひつくり返す家藏誠に亂に及ばぬほどの酒もりの至極はつれ〳〵草に平の宣時朝臣老の後むかし語りに寂明寺入道或宵の間に呼ることありしに頓てと申ながら直垂のなくて兎角せしほどに又使來りて直垂などのさふらはぬにや夜なれば異樣なりとも疾とありしかばなへたる直垂内々のまゝにて罷りたりしに銚子に土器とりろへて持出て此酒を獨たうべんがさう〳〵しければ申つる也さかなころなけれ人は靜りぬらん去ぬべきものやあるといつくまでも求たまへとありしかば紙燭さしてくまく〳〵求しほどに臺所の柵に小土器に味噌の少しつきたるを見出て是ぞ求め得て候と申しかば事足なんとて快く數献に及んで興に入られ侍りき其世にはかくころ侍りしと申されき寂明寺どのは天下の執權たる身

に儉約なる酒盛して諸國の政事を談じたまひけるは實ありがたき酒盛ならずや何分酒は呑ども醉ぬほどで止るとくせは出ぬ醉たら誰でも癖が出るろの癖を傍からみる笑止さしかし醉のは酒ばかりでもない茶に醉てきよろ〳〵と道具を買立家の表へしもあり茶の間やざしきの普請に醉て家がぐる〳〵舞もあり又金に醉て己が倒るも知らず人を轉したがるもあり或は名聞に醉て身体が虛損するもあり亦過去や未來の粕に醉て狼狽るもあり若い息子や手代は妓女に醉て足がひよろ附てあがるもある娘や下女は戲場の役者や色白な男に醉て狂亂のやうになるもあり亦衣裳や櫛笄に醉て且那にれ目玉貰ふもあり悉く無明の醉がさめぬ〳〵何れ身のどくになる事がすきじや或所に酒好の人大病に取合せ既に危かりしに親類相談して種々醫者を替てどふやら此方者になる家内は勿論親類までも喜ける が追々快氣に趣きける或日病人醫者に向ひ酒はまだ呑ませぬか醫者いや〳〵決してわるふござると敕さぬ病人精を落しけるが三四日も過てまた

酒を問もゑ醫者も宜しからぬとは思へどおれはど呑たがるもの少しなら格別害にもなるまじとさらば隨ぶん少さい猪口をれ出しなされ分量を究て上ましよといへば内室猪口を三ッ四ッ持て出られければ醫者中ぐらねの猪口を取てこれで半分れあげなされ一つは過ますこゝで四五日もしたら一つになされませまあ半分で御辛抱なされと言て歸られければ病人内室に酒をかんして今のちよく持てれしやといひ附れば早々酒と猪口を病間へ持參せられければ病人うれしげに猪口とり上げさあつげといへば内室懼〳〵半分つゞ病人ひとつつげといへばめつろふな唯今れ醫者樣が半分よりならぬと被仰ました今日はまあ半分になされませ病人目にかど立て一盃つげと言けるもゑ氣に逆ふてはあしゝと是非なくひとつゝぎければ病人喜び半ぶん呑でさあ直して置と渡しければ内室半分なら始から半分になさればよいにひとつつげとれゞしやる故恟りしましたとわらへばさればとよ同じ半分なら上の半ぶんが徳じやといはれし實に人欲は逞しい

ものじや誰も平常慎しむ意とさし當て身の爲所とは齟齬するもの也たとへば心には金が溜たいと思ふて居れど身には遣ふつもりばかりして又長壽がしたいと思ふて身ははやく死るやう不養生してゐる又人に譽られたいと思ふて身は勝手ばかりして愛疎つかされてゐる皆意に思ふと身の持やうとは雲泥のちがひなり是則口腹の欲に醉てゐる安排なり酒に醉て性根を失ふと人欲に迷ふて本心を失ひ心の行衛を忘るとは道理は同じ事ならずや貴賤老若男女とも酒ばかりではない君父への事は疎にして外の事に醉て性根を失ふては居ぬか名聞利欲に迷ひ醉て性根を失ふては居ぬか婦人がたは夫舅姑への仕へはろこゝにして我身の勝手に醉て性根を失ふては居ぬかその外萬の事に醉ては居ぬか性根を失ふては居ぬかと意と身の行ひを引合せ恐れつゝしみて無明の夢を覺したまふべし

子曰唯酒無量不及亂

或狂歌に「狂ふはど醉はこゝろもにごり酒のまずしてすむものでころあれ

聖人手近き事を以て教たまふ譬ば三人寄て萬の事をするにいづれ勝劣あるがごとくに心も同く勝劣あり其勝りたる人を我師とし其劣たるを見ては我にもかゝるとあらんと改るを道の修行とすれば是善に進むの近要なり或句に染ろまぬありて野山のにしき哉善にろみ悪きに染ずして自然善人なり徒然草に容貌こそ生れつきたらめ心は賢きよりかしこきに移さばなどかうつらざらんとあり生附た容貌は是非がない撃蒙要決に此事が委く云てあれど漢文で聞にくい故にひらたふ言ば人の容貌は生れ附もろ醜き顔をたとへ千萬金出しても妍く変る事は出來ぬ若金づくで器量がようなるとなら金持はよかろが貧乏人は堪らぬ事で世界がひつくり歸りろうな事じや亦力の弱い人がどの様な藥呑でも強ふはなられぬ眷の低い人が何ほど手を盡ても高ふはならぬ世界中の人が兎角ならぬ無理な事や欲な事を神佛に願たり祈たりしてさま〳〵苦勞するは愚な天上じや夫より爲ばなる事に志しを立るがよい徒然草にある通り心はいかやうにも成もの

今世の人の身の上にある事じや此頃さる所に相應に〳〵らして居る人内室も美しい夫に或所の娘を妾にして晝夜とも妾宅がよひ此妾旦那のはな毛をよみ盡すほどの狠者ゆゑ終に本妻よ暇を遣ち思ひのまゝに女房となりしが夫から身体がひよろ附出し元手銀いたん〳〵減る借金は追々殖る諸方から煎附やうに責債る召仕ひい皆私欲する終には住馴し所にも居られず裏店へ逼塞して爺は鳥おどしのやうな姿になり嫁い前だれ帶で手鍋さげ永劫貧乏の釜焦にて苦をみたり實に抜群愚ならずや實色欲にて身を亡ぼす家を失ふ事數しらず恐れ慎み悪を改め善道よ進みたまへかし

子曰三人行必有我師焉擇其善者而從之其不善者而改之

よしをとりあしを刈なゝふしの間にまよふ難波の夢もさめまし

神道教訓

心の行衛三編下の巻　終

明治廿九年十月八日印刷
同　廿九年十月十五日發行

月窓書屋藏版

神道教訓　心の行衛

著作兼發行者　大阪市南區盥町通四丁目百七十五番屋敷　伊澤駒吉
印刷者　大阪市西區立賣堀北通一丁目三十九番屋敷　矢野松之助
專賣者　大阪市心齋橋通順慶町北へ入　此村庄助
專賣者　奈良縣下大和國添上郡帶解　木原保吉

奥田頼杖先生著
●心學道之話　洋綴美本全一冊　定價金貳拾貳錢　郵稅拾錢

中澤道二先生著
●道二翁道話　洋綴美本全一冊　定價金十七錢　郵稅六錢

樹下恂先生著
●教訓心の行衛　洋綴美本全一冊　定價金十貳錢　郵稅六錢

布施松翁先生著
●松翁道話　洋綴美本全一冊　定價金十貳錢　郵稅六錢

柴田武修大人閲書
●鳩翁道話　洋綴美本全一冊　定價金十二錢　郵稅六錢

手島堵庵先生著
●手島道話　洋綴美本全一冊　定價金十四錢　郵稅六錢

發賣書肆　大阪市南區心齋橋筋順慶町北へ入　欽英堂　此村庄助